

教育論考

～新・教育協働への道～
(総集版)
P a r t 2

教育協働研究所
～岳陽舎～

井 上 講 四

2024年1月

※本「新・教育協働への道（総集版）Part 2」は、先に作成している「新・教育協働への道（総集版）Part 1」（2023年8月）に続くもので、令和5年7月から書き始めた「新・教育協働への道」（11～20）を、一部修正の上、総集したものです。改めて、よろしくご笑覧下さい。

※連絡先

ホームページの URL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- 11 やりたい（かった？）ことは、「理想」と「現実」の間で苦悩する人達への
応援?! 1
- 12 問題なのは、「何を求めての協働なのか！」、その全体像・課題共有の不在?!
..... 6
- 13 「統合（integration）」を再考する?! もう一つあった「大切な要素」?!
.....11
- 14 身近にあった、「教育協働」の新たな形！凄いぞ！心ある人達！
.....16
- 15 「積分（学）」に見立てた「教育協働」の手順?!だが、やはり？それだけで
は?!21
- 16 エジプトが教えてくれた？我々の「失敗」?!だが、「レジリエンス」がある?!
.....26
- 17 「PTA」もか！いたるところで噴出している？「教育協働」への新たな契
機?!31
- 18 敢えて「教育の未来」としたい?!そこには、どのようなしくみが必要なの
か?!36
- 19 「課題」は見えているし、共有もされている?!だが、その先にあるものは？
.....41
- 20 問題は、それ（「課題」）を、誰（どこ）が、どのように担っていけるのかで
ある！46

11 やりたい（かった？）ことは、「理想」と「現実」の間で苦悩する人達への
応援?!

(1) (外からの)「理想」(要求)と(内部の)「現実」(反発)がパラレルワールド
(並行時空)化している?!

重ねし馬齢の必然?いつか来る、決断の時?とにかく、最近の私が、自らの
「気力喪失(もう、これでいいかあ…)」を、かなり顕著に感じ始めていたこと
は事実であり(他の人も気づいていた?笑)、近いうちに、その事実に対する、
自分なりの決着(踏ん切り?)をつけなければいけないと思っていたことは、
これまた事実である?!

要は、いつまでも現役でいることは出来ず(たとえ、そのフリでやらせてもら
えている部分があっても?、その内実が伴っていないということである!残念で、悔
しくもあるが、そのことは、当の本人が一番自覚していることである!)、そのこと
を、きちんと?自らに言い聞かせなければいけないということであった?!

ただし、そうは言っても、その決着(踏ん切り?)の仕方には、自分なりの
納得が欲しかった?!未練がましいと言われれば、それまでだが、問題は、いつ、
どのようにして、その時を迎えるかであったということである?!

そんな中、その決着(踏ん切り?)の仕方に大いにつながるかもしれない(自
分なりの納得が得られる?)、一つの夢想(哀しき美学?)が浮かんできた?!言い
換えれば、このような自分が、これからでもやれること、否、やらなければい
けないと思えることが、半ば忽然と?芽生えてきた?!

あるネット記事を見ながらのことであるが、ひょっとしたら、今、私は、最
後の決断?をすべき時が来ている?!ここで、それに対して、何もしない(or
言わない)のならば、私の「新・教育協働への道」も途絶えてしまう?!

それは、あたかも、最近のうだるような暑さに負け、心身共にとろけそうに
なっている自分の無様な姿のようにも思える?!本当に、それでよいのか?そう
いうことでもあったということである?!

ということで、いつにもまして、怪しげな?書き出しとなったが、実は、そ
れが、標記の「パラレルワールド(並行時空)」という論点・視座であり、そ
こへの言及が、私自身が、最後に出来る?否、今からでも遅くない?私がやら
なければ、誰がやる?そういうことへの答となるのではないかということであ
る(過剰な自信だと、失笑を買うかもしれないが?)?!

ちなみに、もちろん、その「閃き?」自体は、直接的なきっかけとなったの
は、件のネット記事であるが、ある意味、そのことについては、私自身が、現
役時代から、ずーと考え続けてきたことでもある(ただし、そこでは、「パラレ
ルワールド」という言葉、概念さえも知らず、結局は、己の身の処し方としては無様
なものとはなったが!)?!

そこで、改めて、今回考えたことを示すと、まずは、「教育協働」という大

きな視点、取り組みの枠組みを、まがりなりにも、これまで何度も（しつこい位に？）提唱してきた私であるが、その成果は、ある所には顕著にある！あるいは、大いに、その途上にある？！

しかし、一方ではまた、多くの所では、その端緒は見られるが、なかなかその先が見えてこない（いない？）?!あるいは、まったくの未知（混沌？）に留まっている？！

その違いは何なのか？そして、その違いを克服する手立てはあるのか？あるとすれば、どういうものなのか？

そうしたことが、事あるごとに頭を過っていたわけであるが、今回、そこに、新たな要素、ある意味では盲点？だった、ある事柄（視座）が見えてきたのである（ただし、それへの言及が、多くの人の賛同を得られるものとなるかどうかは、別問題である！それは、あくまでも、私自身の納得の問題である！）?!

(2)パラレルワールド（並行時空）になれば、その間で苦悩する人達が出てくる?!

では、具体的に、ここで言う「パラレルワールド（並行時空）」という事柄（視座）とはどういうものかということであるが（もちろん、この概念は、元々は宇宙物理学のそれであり、短絡的な用語使用は厳に慎まなければいけないであろうが、ある集団の立場や言い分が、そうした関係に陥ってしまっている？ということの比喻として、大いに借用できるということである?!）、

今回のネット記事の場合は、教員が属している（あるいは共有している）学校の現実（感覚）の世界と、ネット記事等で紹介されている研究者・著述者の理論や見解の世界が交わっていない（あるいは交わろうとしていない？）?!

最早、双方は、次元的に異なった世界にいる?!否、正確には、前者は、後者の世界（声）を見たくない（聞きたくない）、そういうところにまできているのではないかということである?!

例えば、今回の記事では、「個別最適な学びと協働的な学び」の意義や、それに呼応する教師の「子ども観と仕事観」へのアドバイスや努力の方向性が示されているにも関わらず、そのコメント欄には、残念ながら、現場の混乱・苦悩が分かっていない！そういうことよりも何よりも、まずは「人員を増やせ、予算をつけろ」というような論調・反論が多いということである?!

また、「N先生は、次の学習指導要領はどのようになると思われますか？今のカリキュラムや学力の方向性が大きく変わることはないと思います。ただ子どもに学んでほしいことが多すぎる、カリキュラムオーバーロードへの懸念は世界的にも問題になっていて、日本も例外ではないかもしれません。

学習指導要領の中で、教育方法を限定的に示すことは好ましくありません。現場の足かせとなり、自分にしかできないよい授業をしたいという教師の気持ちを砕くからです。『個別最適な学び』や『協働的な学び』も、子どもの学び

であって、それを実現する教育方法は多様に存在します。また発展するテクノロジーについて、学習指導要領でどこまで触れるのかということのも悩ましい問題ですが、授業の景色はさらに変わっていくかもしれません。先生が全然足りない教育現場、なぜ公教育はこんな惨状になってしまったのか？」ともある！

いずれにしても、私は、基本的には、どちらの主張（または理論）も正しいことであり、その双方が、同時に活かされて欲しいと思うのであるが、ただ、ここで、私が危惧するのは、「また、同じようなこと（綺麗ごと？）を言いやがって！」とか、「あなた達のようなお気軽な人が、外からどんなことを言っても、結局は、現場は何も変わらない！

ただ、仕事や負担が増えるだけ！」というようなスタンスとか批判感情が、その当否はともかく、（学校）現場では、かなり強固に作り上げられているのではないかということである?!

しかも、人の世は、残念ながら、こうした「パラレルワールド」を、知らず知らずのうちに（時には意図して?）、作ってしまうということである?!

ある意味、それはそれで仕方がないのであるが（誰しも自分が可愛いのである!）、敢えて私が言いたいのは、そうした状況において、その間で苦悩する人達がいるということであり（時には、自らの命を絶つ人もいる!）、さらには、そうした人達の存在をないがしろ（犠牲?）にして、その「パラレルワールド化」が進行してしまうということである?!

しかも、最悪の場合には、それを生み出している本体自体も、消えてなくなったりすることもあるということである?!

つまり、それぞれの人達の生きる場所（糧）である「パラレルワールド」が、別の「パラレルワールド」に飲み込まれたり、消されたりすることもあるということである（学校の統廃合等は、その最たるものである?）?!

極論すれば、いがみ合ったり、批判し合ったりすることができる間は、まだまだよいのであるが、それができる場や関係までもがなくなってしまうえば、お互いにとって、何のための言い合い、労苦であったのか? そういうことにもなっていく?!

辛辣なことを言えば、教育とか、福祉とかというような、言わば「聖域」であっても、そうした力学は働くし、そもそも、その「聖域」というもの自体が、少なくとも組織・機関のレベルでは存在しないということである?!

(3) 微力でも、細々でもいい！苦悩している「心ある人達」を応援したい！それが、私の…願い?!

理想と現実、理論と実践、行政と現場、経営側と労働側、保守と革新、与党と野党、etc. うまく描出できないものもあるが、言わんとすることは、そこに、埋め難い溝（ある意味では「心の壁」?）みたいなものが出来上がり、激しく対立し、醜い正否論争まで繰り広げ、結果、余計な時間と労力を費やさなければいけないことだって、往々にしてあるということである?!

本当は、対立するために、それらがあるわけではないのに、いつのまにか、対立する（背を向け合う）ことが常態となってしまう?!

しかも、そこでは、個々人の弱さかもしれないが、過度の人格否定や存在拒否にまで発展してしまう?!! 利害関係や主義・主張の違い、それらが、そうした事態を引き起こしているわけであるが、問題なのは、その関係が、常に相対立し、あたかも、それぞれが「パラレルワールド（並行時空）化」していく?!

つまり、それぞれが、別個に自己目的化し、しかも、厄介なことに、それぞれのシステム・人間関係を、自らの存続のために（だけ?）動かしていく、あるいは自己増殖化させていくということである!

要は、大切な共有の時間と場所ではあっても、双方が、永遠に交わることができないような関係になってしまうということであるが、

しかしながら、たとえ、そういう状況であったとしても、自らの信念や理想の下に、苦悩しながらも（時には、病気になったり?）、健気に、今、どのようなことが必要なのか（求められているのか）を、広く、冷静に見つけ（め）、ここが重要であるが、数は少なくとも、そのことに心を寄せ合える仲間・同僚と一緒に、行動している人もいる?!

繰り返すように、私は、そういう人達のことを「心ある人達」と呼んでいるわけであるが、そういう人達への、たとえ微力、そして、細々としたものであっても、可能な限りの応援をしたいのであり、それが、まさに、私が、これから（最後に?）やりたい（やれる?）仕事?だと思いたいのである! 言い換えれば、まさにそれが、私の決着ということなのである!

しかるに、ここでは最後となるが、これまでの「教育協働セミナー」に替えて、新たに「岳陽チャンネル」という名称で、そこでの精神と成果を継続（発展?）させるべく、一人でも多くの「心ある人達」との交流、ネットワークづくりを、改めて志すことにした!

それぞれが、それぞれの立場、思いで、日々奮闘しているわけであるが（時には夢破れ、疲れ果てた時期もある or あった?）、その思い、その努力の姿を見合える（感じ合える?）場や関係が、今こそ、否、これからも必要であり、貴重なのである!

しかし、残念なのは、その出会いや結集の術がなかなか見つからない? 否、そもそもそういう時間が取れない（ある意味それどころではない? 皆、忙しいと言えば忙しいのである?）! ということであった?!

ついでながら、その課題（隘路?）を、少しでも解決するための工夫（日時、開催方法等）を、今回は考えたが、果たしてその結果は? 初回 < 7/8（土） > は、直接参加することが出来なかった人が多かったが（その旨の連絡は多々あった!）、問題は、当然、この後である!

それでも、成果が見出せなければ、それはそれで仕方がないが（それこそ終わりにしなければならぬ!）、コンセプトや交流の意味は、これまでとは、かな

り違うものであり、新たな参画者も期待できるのではないか？そういうことも、思ったりしている！もちろん、この記事をご笑読されているみなさん（あなた？）の参画も、大いに歓迎するものである！

（つづく）

12 問題なのは、「何を求めての協働なのか!」、その全体像・課題共有の不在?!
(1)「協働」が必要なのは、みんな分かっている!だが、個別課題・取り組みの羅列だけではダメなのだ?!

過日、中央教育審議会が、目下の最重要課題である「教員の働き方改革」について、緊急答申（「質の高い教師の確保特別部会：教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策（提言）～教師の専門性の向上と持続可能な教育環境の構築を目指して～」）を出した!

そして、そこには、私にとって、特に注目されるべきものとして、1. 学校・教師が担う業務の適正化の一層の推進に、(1)「学校・教師が担う業務に係る3分類」を徹底するための取組→「国、都道府県、市町村、各学校のそれぞれの主体ごとに、具体的な対応策の好事例を横展開」、2. 学校における働き方改革の実効性の向上等に、(1)地域、保護者、首長部局等との連携協働→「学校における働き方改革等を学校運営協議会や総合教育会議で積極的に議題化」があった。

それはともかく、私の聞き間違いであったのか、テレビ放送での、(部活動の?)「地域移行」による課題解決の方向性が五つに亘って示されている(だから、期待して調べてみたのもあるが!)というようなことはなかったが、一応、今現在、取り組み可能なことが、ほとんど網羅的に示されているとは言えるであろう?!

ただし、それにしても、それらは、やはり予算的な裏付けがなければ(スタッフの拡充等)、なかなか実現は困難であろうと思われるものばかりでもあった(審議会委員のみなさんには申し訳ないが?)?!でも、あくまでも「緊急(提言)」ではあるので、それはそれで、よしとしなければいけないであろう?!

ということで、今ここで、改めて、その具体的な提案内容については、私だとやかく言うことはないが(ある意味失礼でもある?)、私には、やはり?「残念なこと」がある!

それは、相変わらず、従前の「学校(教育)」の枠組み・受け止め方を前提としており、これまで以上に?、他(外部)からの協力要請、それらとの連携・協力の必要性が叫ばれてはいるが、そこにおける取り組みや、その方向性が、新たな地平(パラダイム?)を求め切れていないように思われるのである?!

すなわち、そこには、「教員の働き方改革」という、新しい課題、新しい看板(キャッチコピー)が提示されてはいるが、そこに示されている「教員の働き方の問題」は、以前から指摘されてきたことであるし、何も忽然と現れた問題ではないということである(教員不足や指導時間の問題として騒がれ出したとは言えるが、それらは、まさに「学校の限界/制度疲労」の問題として危惧されていた?)!

多少誇張して言えば、かの「生涯学習体系への移行」とか、「生涯学習社会

の実現」とかは、実は、そういうことを超克するための施策スローガンでもあったということである（「社会教育」の世界だけの話ではなかったということである!）?!

そこで、改めて私がここで言いたいことは、いかなる「教育問題」においても、最早（と言うよりは、「原点に戻って」と言う方が的を射ている?）、そこに見出されていくべき最重要課題は、学校内外における「連携・協力」の必要性と、それを促進・実体化させるための全体的なしくみ、すなわち「(教育)協働のしくみづくり」への力強いヴィジョン提起であるということである!

何故なら、そうした受け止め方、課題意識の方向性がなければ、これからの、「(学校)教育」におけるいかなる問題・課題も、その抜本的な解決には至らない?!だから、その時々個別課題・取り組みの羅列だけではダメだということである?!

(2) 求められる課題解決の方向性、その全体像?が見えていない?!だから、単発で、バラバラなものとなる?!

しかるに、繰り返すようであるが、その理由は、いたって簡単である?!学校は、社会における教育の専門（占有）機関ではあるが（そのように意図されて設置されている!）、絶えず変化していく時代状況に即応して、すべての教育機能（我が国においては、「家庭教育」の補完・肩代わりという機能も、大幅に担わされている!）をそこで発揮していくことは、理論的に（理想?）はともかく、現実的には無理なのである（そのために、「社会教育」と呼ばれる分野もあるわけであるが!）?!

そこにおけるニーズが、多様化、高度化、分散化しているということが、それに拍車をかけているわけであるが、現状のままの枠組み（法制度及び人的体制）では、とてもそれに対応できない状態（段階）になってしまっているということである（それは、学校の宿命である?）!

ちなみに、例えば、今回の答申（「教員の働き方改革」）と、やっとな?望まれる方向性を示したかに見える、「新しい教育課程」、あるいはそこにおける「地域学校協働活動」（CSや地域学校協働本部事業等）というような発想や取り組みは（これは、改めて注目されるものと思われるが!）、ぶち明け、どのように関わっているのか?

最初に示した、私が注目した部分がそれに該当するわけであるが、少なくとも一部は（否、大いに!）、それに連動させての提案であるのかどうか?!

他に、「チーム学校」、「アクティブラーニング」、「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラム・マネジメント」等のスローガン（新しい方向性?）は、今回の提案と、どのように関わっているのだろうか?!

それらすべては、新たな、内外における「連携・協力」の促進と、それを実体化させる「力強いヴィジョン」、すなわち「(教育)協働のしくみづくり」を

求めているものであるが、その辺りは、一体どのようになっているのか？

それが、実は、かの「総合教育政策」へのシフトなのでもあるが、先般の「部活動の地域移行」という表現（発想）からも明らかなように、今回も、従来の「学校観」「教育観」、さらには「地域観」から抜け出していないようにも思える?!

このように、ここでは、改めて、「新たな、内外における『連携・協力』の必要性と、それを導き出し・支える『(教育)協働のしくみづくり』が求められている!」ということを確認したいのであるが、何度も繰り返しているように、そこには、「学校」、「教育」、ひいては「地域」についての捉え方（現状認識）が、旧態依然のものであったり、適切な状況把握の下になされていないものであったりすれば、

次から次へと、課題やスローガンが山のように押し寄せるばかりで、その多さに？辟易し、圧倒され、多くの人にとっては、何を、どのようにしていけばよいのかが分からなくなる（見えなくなる?）ということである!

ただし、もちろん、金銭面での手立てが、一時的、あるいは表面的な解決をもたらすことはあるであろう?!だが、たとえそうであったとしても、多分、多くの（心ある?）人は、その受容には、かなり複雑な思いが過るであろう?!

というのも、人は、何のためにやっている（頑張っている）のか?その意義ややりがい（→実感・納得）がなければ（見失えば）、そこから遠ざかって（壊れて?）いく?!そこが、今、教育界が陥っている問題の本質とも言える（単なる労働時間の長短の問題ではないということである!）?!

だからこそ、本当に必要な課題解決のための全体像（見取図）が必要だということである（個別・単発では、それが見えない!）?!

(3) 求められているのは、「教育全体における協働」であり、「学校に関わる協働」だけではない!

そんな中、本当は、その全体像?を求める動きは、始まっているとは言えるのである（→「新しい教育課程」、「総合教育政策」等）?!ただ、残念ながら、それが、「これが答えだ!」と、多くの人を実感していない（しようとしていない?それ故に、まだまだ、そこには確かな全体像（見取り図）が共有されていない?）?!

だから、今回の答申も、依然として、学校からの「地域移行」とか、「地域との連携・協力」ということでしか語れない?!そこに、まだまだ、その「新しい成果」が見えていない?!そういうことでもあるわけである?!

しかしながら、問題?は、それだけではない?!すなわち、そこには、一方の、地域の側（事実上は「社会教育側」!）の積極的な関わり、参画の方向性が見えて（or 見込まれて）いないということである?!

他ならぬ、移行、連携・協力を要請する側の「地域」に、そうした要請に応えられる状況、組織・人的態勢がどうなっているのかがよく知らされていない

ということもあろうが、実は、そちらの方も、変わってきている部分もあるのである（いくつか、ここでも紹介したこともある!）?!

要は、双方の課題や成果を、より緊密に結び合わせるということが、これからは重要であるということであるが、そこで、今改めて必要なのは、「教育全体における協働」であり、「学校に関わる協働」だけではないという課題意識の共有だということでもある?!

しかも、現実の「地域」だけであれば、人々の、昔懐かしい生活共同体（コミュニティ）の姿・形はなく、そこに呼びかける移行、連携・協力などは、ほとんど「夢物語」となる（そこには、横／隣近所のつながり、助け合いの風潮などは、残念ながら、一部の例外?を除いて、ほとんど雲散霧消している?!だから、「地域の絆づくり」等が、社会教育の側から叫ばれてもいる!）?!

「地域移行」とか「地域との連携・協力」といっても、地域の側も迷惑?な話となり、結局は、誰かの、あるいはどこかの、無理を承知の引き受けによってしか、実現しない?!

だから、そこにある「学校」、あるいは「教育」、さらには「地域」の捉え方、課題共有の仕方が、双方の分野で整っていなければ、一部の人（組織）が大慌て、そして大半の人が見て見ぬふりをするだけとなるということである?!

以上、一見すると、当座の学校からすれば、教師の肩代わり?をしてくれる人を見つければ、それでよいということになるが、今や地域には、そうした一方的な支援を、快く引き受けてくれるような人はいないし、みんな、それぞれの生活に汲々としているということである（コロナ禍や異常気象、世界情勢の逼迫等が、それに拍車をかけている!）?!

その意味もあって、私は、これまで、そうした「学校と地域との連携・協力」の課題を、「学校教育と社会教育との協働（「合力」の発揮）」という方向性と、それに基づく施策の総体という意味での「地域学校協働→教育協働」という枠組みを提唱してきたのであるが（→「まちづくりとひとづくりの循環構造図」）、それはまた、今回の「教員の働き方改革」をも包含するものと言いたいのである!

最後になるが、来る9月20日（土）のセミナー（沖縄県立玉城青少年の家と那覇市繫多川公民館との共催）では、同公民館の、近隣小学校との「分館活動」（公民館の職員が、「社会教育士」として、2日間当該学校に滞在して、教育活動に参画する）が紹介される!

果たして、この取り組みが、ここで言う「教員の働き方改革」にもつながるものなのか?!私には、その答えは、十分過ぎるほど分かるのであるが、他のみなさん（世間?）はどうなのか?!

そして、当該学校の校長（それに追従しなければいけない?教頭はじめ、中間管理職のみなさんも）はともかく?、一般の教員のみなさんは、「またしても、余

計(過重?)なものを持ち込んできて!」と思っているのかどうか?!出来たら、その辺の実情(本音?)も、是非聞かせて欲しいものであるが…

(つづく)

13 「統合 (integration)」を再考する?! もう一つあった「大切な要素」?!

(1) 「協働」をミスリード?したのは、「統合 (integration)」理念への一知半解だった?!

早速であるが、ここでは、先号 (12) で書き切れなかったことがあるようにも思われ、果たして、それが何であったのかということ突き詰め、改めてそれを、ここに書き記し、そして、おそらく、それと関わってくると思われる、かの「統合 (integration)」理念を再考することを目標にして、論を重ねていきたいと思う!

すなわち、先号では、改めて、「教育協働」の意味と、それが実現すべき目的・目標 (課題) を述べたつもりであるが、そして、そこには、徐々にではあるが (本当に時間が掛ったが?)、その目指すべき (本来の?) 姿・形が見え始めてきてはいるが (あくまでも結果的にではあるが?)、一方では、まだまだ、そのための課題共有が不十分なのではないかということを書いたつもりであった?!

しかしながら、書き終わって、改めてそれを読んでいくうちに、そこには何が足りない?あるいは、これまでの主張を繰り返すだけで、新たな突破口 (説得力?) となっていない?そのような思い、感触が、何故か俄かに生まれてきたのである?!

果たして、それが何なのか?今更、何故、そういうことを言い出すのか?そんなことを思わないわけでもないが、近々、久しぶりに、現職 (最前線の?研究者) の人達との出会い (知り合いではあるが!)、そして、公民館と (小) 学校との「協働」の新たな形 (「社会教育士」の活躍の場づくりとしての、「公民館の分館活動」?) の事例発表セミナーがあるので、現状では停滞している、教育分野への思惟活動の再開 (活発化?) を期して、ここでの論考を急いだという次第である!

そこで、まず手始めに、ここでは、最近、改めて感じ出している、件の「教育協働」が唱導されるきっかけ (追い風?) となった、いわゆる「生涯教育 (学習)」の主軸理念、すなわち「統合 (integration)」の概念から、上記の、その不十分さの原因の一端を捉えてみたい!

何故なら、そこに、重大な見落とし (言うなれば、その後の「ミスリード?」の主因?) があったのではないか?そう思えてならないのでもある?!だから、あんなに盛り上がった?「生涯教育 (学習)」論議が、今は、ほとんど消え失せてしまっている?!

ただし、もちろん、一定の成果として、例えば「教育基本法」への規定、そして、名称としては、その後変わったが (生涯学習政策局→総合教育政策局)、そこにあった連携・協力 (統合?) へのシフト変更は、かなりの不確定要素を孕んではいるものの、大勢としては評価されるものではある (根っからの社会

教育関係者にあっては、かなりの憤懣もあるが！)?!要は、「総論」から「各論」へ、「理想(理念)論」から「現実(実体)論」へと、事態は変わっていったのだとも言える?!

とは言え、それはともかくとして、考えてみれば至極当然ではあるが、その不十分さは、訳語(引いては、提唱者のP. ラングランの原語?)の所為^{せい}ではなく、我々が、それによって得られる(求めようとした?)具体的な姿・形(or イメージ?)を共有出来なかった?!

あるいは、そこにあった、一部の(本当は、そうではないのだが!)、言い換えれば、それまで教育界(もちろん学校教育を主軸とした?)から、あまり重要視されていなかった(ただし、切羽詰まっていた?)部分だけが採り上げられ(それは、いわゆる「社会教育」側の追い風 or 復権?という形で?!)、そこだけが喧伝・追求されてきた?!

まさに、「協働」をミスリード?したのは、「統合(integration)」理念への一知半解だった?!と言えるのかもしれないのである?!

(2) 改めて、そこに示されるべきは「(必要な)『全体』『完全』『総和』の意味」?!

ということは、そこにあった、本来は、最も重要な部分を見落としていた、欠落させていたということであるが(「生涯学習体系への移行」/「生涯学習社会の実現」には、事実上、学校教育側の変革のヴィジョンが連動しなかったということ!)、「生涯教育(学習)」は、あくまでも「教育全体」の問題・課題であったということである!?!

だからこそ、私自身は、そのような、ある意味では不整合な施策・動きを懸念し、「教育(形態)の三層構造的把握の必要性」と、そして、それを受けた、「FE/学校教育とNFE/社会教育の協働による」、「ひとつづくりとまちづくりの循環づくりの必要性」を、言わば構図的に示そうとしてきたのであるが、まだまだ、そのことの意義(推進力?)に気づかず(ある意味知ろうともせず?とは言え、分かる人には分かるという自負は、私にはあるが?)、まさにここまで来ているということであるが…?!

だが、いずれにしても、事態は変わってきたのである?!他ならぬ、その学校側のスタンスが、ある意味(皮肉にも?)本気で変わってきたのである!否、本当に変わらなければ、そちらの方が、にっちもさっちもいなくなってきたのである?!

しかしながら、残念ではあるが、その根本的な解決の方向性、否、その具体的な方途が、なかなか見出せないまま、苦悶し、そして、一部の人はそれに負け、さじを投げたり、そこから逃避してしまったりということにもなっているのでもある(顰蹙を買うかもしれないが、敢えて、このような表現で書かせてもらいたい!)?!

もちろん、そのきっかけ(直接の原因)は、子どもや親達との関係、それに

起因する組織における孤立・孤独等があるであろうが、それを打破するだけの気力や体力が、ましてや生き甲斐ややりがい、最早限界となってしまうということである?!

それでも、せめて、自分（達）が、何故このようになっているのか？どうすれば、このような状態から脱することができるかの、辛い、一方での「明るい未来？」が、ちょっとでも感じられる、描けるならば、まだまだ可能性はあると言えるであろう（もともとは、教育あるいは教職に惹かれて教師になったはずである？そのことを、忘れてはいけない！もちろん、論外の輩もいるにはいる！）?!

それが、「(必要な)『全体』『完全』『総和』の意味」の追求であり、そこにおける自らの役割、ミッションの確認なのである?!

実は、それが、先の「最も重要な部分」にも直結してくるのであるが、その成否を左右するのが、改めて、かの「タテの統合（時間軸）」と「ヨコの統合（空間軸）」によって、「全体の統合（制度的統合）」をなすという捉え方、方向性の共有の有無なのである！

しかし、それは、それだけでは、あくまでも「全体の見立ての手続き」であって、肝心な（説得力のある？）「目的論」とはならない（だから、私は、それを解決する？ために、「タテの統合（時間軸）」を実現するために（→目的論）、「ヨコの統合（空間軸）」がある（→方法論）というような関係づけで、そのことを克服（納得？）しようとしたわけである！それでも…？）?!

では、どうするのか？

(3)では、改めて、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』を導くものは何なのか？

ということで、改めて、そこに、どのような問題点（言い換えれば隘路？）があるのか？まさしく、そこが問われるわけであるが、今回、ひょんなことから（ある意味暇でもあったので？）、改めて、英和辞典を見てみると、「integration」とは、「集約（まとめる）」「統合（結びつける）」「統一（合体させる）」「融合（融和させる）」ではあるが、そうすることによって、(必要な)「全体」「完全」「総和」を創り出していくこととある（手持ちの辞典ではあるが、そんなには間違っていないであろう？）！

いやいや、「integration」という言葉（原語）の所為^{せい}ではなく、訳語「統合」の解釈・活用の問題であり、そこでの重要な要素、すなわち『『結びつける』『つなぐ』『集積する』』ことによって、(必要な)『全体』『完全』『総和』を創り出していくこと、とりわけ後半の「(必要な)『全体』『完全』『総和』を創り出していくこと」という部分への視点（配慮）が足りなかったということが、言葉（原語）の本来の意味からも明らかとなったということであるが、

ここにまた、「統合」によるミスリード？があったものと思われる?!しかも、これは、ある意味では「致命的なミスリード？」であったとも言えるかもしれ

ない?!

とにかく、これには、いささか驚きもするが、では改めて、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』」とは何なのか?

ここでは、半分冗談ではあるが(否、本気かな?)、今回の「学校(教師)の働き方改革」とか「(部活の)地域移行」の問題を、例えば世間に信頼されている?著名人(林修氏とか池上彰氏とか!彼らは、最近、あるテレビ番組で、教育について対談していた!ある意味流石であった!)が、「学校(教育)と社会教育との協働」という表現(発想)で提唱して(or 触れて)くれたならば、大いに「山?」は動くかもしれない(もちろん、残念ながら、彼らには、そうした発想自体はないようでもあったが…笑)?!

ただし、くどいようであるが、彼らが、そうした発言をしようがしまいが、客観的な事実としては、既にそうしたことは、動いているところは動いているし、ある意味、そのことは、まさに「教育としての理の当然」なのではある?!

そこで、これも、半分以上?思いつきの域を出ないが、実は、これは、数学(微積分学)でいうところの「導関数」と「微分係数」の関係に似ていると言えるのではないか(しかし、これは、素人の直感 or 遊び心!だが、そこにあるintegration/統合という考え方には、相通じるものがあることは言うまでもない?)!

譬えて言えば、そこにおいて、「導関数」みたいなもの(ここでは問題解決のための構図枠組み)が分かれば、それぞれの地点での「微分係数(傾き)」(解→その時の解決状態)が分かるということであるが、要は、その「導関数」が「ひとつづくりとまちづくりの循環づくり」、そして、「微分係数(傾き)」が、それぞれの、眼前の問題・課題ということである?!

であれば、そこから、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』」が導き出されるのではないかということでもある(まさに現今の「部活の地域移行」「教員の働き方改革」の問題・課題はそうである!)?!

最後に、上記は、あくまでも、言葉(概念)によるレトリックではあるが、大事なことは、その時々において、そうした発想や取り組み(教育協働)によって、何らかの解決、そして、そのことによって誰かが救われる、喜んでくれる、そういうことが大切なのだということである!

ただし、それは、あくまでも、その時々の問題・課題が解決されるということであって、新たな問題・課題が、目の前に飛び込んでくるということでもある?

けれども、そうした視点・取り組み(教育協働)の方向性の意義を見失うことなく、また同じように、しかも繰り返し、みんなが力を合わせて立ち向かっていけばよいということでもある!

「教育」とは、まさに、そういう営みであり(積分?)、それ故に、尊いも

のなのである！このことを、決して忘れてはいけない！それが、ここで言う「(必要な)『全体』『完全』『総和』」だということである?!

(つづく)

14 身近にあった、「教育協働」の新たな形！凄いぞ！心ある人達！

(1) 玉城青少年の家（主催）の「事例発表セミナー」にて見た、そして感じた、頼もしい姿・形！

昨日（9/30）、久しぶりに、ズームを使った「岳陽チャンネル（←教育協働セミナー）を作動させた！しかも、今回は、玉城青少年の家（主催）の「事例発表セミナー」に、我が「岳陽舎」と「那覇市繫多川公民館（NPO法人「一万人井戸端会議」の受託運営）」が協力するという（共催）、三者コラボ形式の実施であった！

いつものように、会場参加とオンライン参加の、いわゆる「ハイフレット方式」で行ったわけであるが、会場が、那覇市内の「繫多川公民館」であったということもあり（ただし、オンライン参加の方が、圧倒的に多かったが！）、かなりの参加人数であった（その後の報告では、総数で40名だったという。）。

そこで、ここでは、予定していた論稿（「積分（学）」に見立てた「教育協働」の手順?!だが、やはり？それだけでは?!」）を先送りにして（次号にて掲載予定!）、今回のセミナーの成果や意義（大きくは二つ?）を、私なりに整理して、以下、思うが儘に（今回は、結構突っ込みを入れて?）書き記していきたいと思う！

ちなみに、今回の論稿は（特に最後の部分は?）、かなり野卑な？それとはなるだろうが、それは、これまでの、長年の思いでもあるが、参加者への、偽らざる思いであり、是非一度は、正式に？吐露しておきたいことでもある！

余談ではあるが、現役時代のそれは、たとえどうであろうとも、一緒に動いてくれる学生達（特にゼミ生達）の気づきや刺激、叱咤激励の機会となればということでもあったので、それ自体は、ほとんど甘受してきたものである（役職や立場を考えれば、それは、ある意味当然?そして、それが、私の仕事であり、任務でもあった?）?!

しかしながら、今や、私には、そんなものは無用なのである！何の損得、忖度もなしに、我が思いを伝え得れば、それでよいのである！

くどいようだが、事あるごとの、私の「思いある人」という言い方には（最近、それが頻出!）、そうした思いが重ねられてもいるわけである！

つまり、やる気や学習意欲があるだけでは、私の言う「思いある人」ではないのである（本音では、言いたくないのでもある!）?!

ということで、まず、先号（13）では、「生涯教育（学習）論」における、いわゆる「統合（理念）」の一知半解について述べたが、そこでは、まさに「（教育）協働」に向けて、「客観的な事実としては、既にそうしたことは、動いているところは動いているし、ある意味、そのことは、『教育としての理の当然』なのではある?!」とか、

言葉（概念）によるレトリックはともかく、「大事なことは、その時々において、そうした発想や取り組み（教育協働）によって、何らかの解決、そして、

そのことによって誰かが救われる、喜んでくれる、そういうことが大切なのだということ」、

そして、しかも、「それは、あくまでも、その時々の問題・課題が解決されるということであって、新たな問題・課題が、目の前に飛び込んでくるということでもある？

けれども、そうした視点・取り組み（教育協働）の方向性の意義を見失うことなく、また同じように、しかも繰り返し、みんなが力を合わせて立ち向かっていけばよいということでもある！

『教育』とは、まさに、そういう営みであり（積分？）、それ故に、尊いものなのである！このことを、決して忘れてはいけない！それが、ここで言う『（必要な）「全体」「完全」「総和」』だということである?!』というようなことも書いていた！

(2)ある参加者からのメール！「社会教育士」が、学校という場所で融合していて面白い！

しかるに、今回の事例発表には、まさしく、そういうようなことが、既に実現、実行されていたのである！しかも、それが、公民館（NPO法人による受託運営）の職員（館長MさんとスタッフHさん）の思いと行動によって始められているのである！

ここでは、それを詳しく紹介することは出来ないが（後日、この模様は、玉城青少年の家のHP上に動画アップされると思うので、関心のある人は、是非そちらを視聴して欲しい！）、これについては、たまたまオンライン参加出来た、K県で、小学校の教師をしている、愛称？「A（旧姓K）さん」からのメール感想を、是非紹介させてもらいたい（取り組みの大枠は、それで理解されよう？）！

ほとんどが、私堂本が、評価（確認）したいことでもあるので、敢えて掲載させてもらう次第であるが、このような受け止め、考え方をしてくれる現場教師が、一人でも多くいることを、そして増えていくことを、切に念じているということでもある（事後承諾とはなりますが、Aさん、本当にありがとう！）！

…ここからは、私の今日の発見です。ハード面の事（授？）業や連携室にソフト面の社会教育士が学校という場所で融合していて面白い。教育課題からフォーカスすると個別の事例になり、こども食堂、不登校支援などなど、利用者が限定され、課題も多いから、場所、事業、予算などハード面を次々と増やさないといけない。

でも、地域づくりからフォーカスすること「学校を核とした地域づくり」をすることでそれぞれがよりよく生きようと認知症カフェと放課後の子どもたちの居場所が共存できたり、公民館のサークル活動が不登校児の学びの場になったりと教育課題を包括的に対処できるのかなぁと思った。

I（敢えてイニシャル！）先生の愛のある質問と言葉選びを久しぶりに聞き

嬉しくなりました。教員の働き方改革ですが、日々の仕事に加えて、例年のやり方ではなく今年子どもたちには、何が必要かと考え、外部講師を依頼した授業や校外学習の行程づくりなどに時間をかけている教員は多いです。地域まーい（回り）も個人でやり苦労している先生は多いです。

連携室にいる社会教育士に相談してヒントをもらうことは働き方改革になります。ここに地域がさらに活性化して、家庭力や学習のフォロー、増しては不登校児支援の心配を一緒に背負ってくれる仲間が増えたら、働き方改革大成功だと私は思いました。…

※括弧書きの部分は、堂本による。

改めて、これほどまでの受け止め方と理解がなされていることに、二重の意味で嬉しく思うし（一つは、もちろん、流石！我が教え子という喜び？ただし、別の参加者で、同じ小学校の教員をしているゼミ卒業生のT君は、非常に分かりやすいものでしたという感想を、別途伝えてくれているので、とりわけゼミ卒業生だからということもないのかな？とも思いますが?!）、

何か、この取り組みが、新たな意義と可能性、強いて言えば「突破口？」を、そして、私の理屈？をはるかに越えて、みなさんに、大いなるインパクトとやる気（元気？）を与えたものであったことは、おそらく間違いないであろう！まさに、凄いだ！心ある人達！ということである！

数年前に受講した社会教育主事講習（国社研主催）の演習時に、グループで考案した事業が芽だしであったということであるが、公民館のスタッフ（ここではHさん）が、

社会教育士として学校に出向いて（週に、午前中だけ1回、終日1回）、「地域連携室」に常駐し（出前公民館→ある種の「分館活動」？）、教職員のみなさんや児童生徒、もちろん父母や地域のみなさんとのやり取り、交流の機会を設けて、学校の教育課程としてのプログラム実施を含めて、それこそ多種多様な連携・協力の取り組みを行っているということである！

(3) 改めて、今回のセミナーの意義、そして、可能性について?!

ところで、今回のセミナー参加者からのアンケート結果を、早速送ってもらった！概ね良好な評価を得ていたが、残念なことが、二つあった！

一つは、事例や事例発表に対するコメントについてであるが、何か彼らは消費者（一方的なサービス享受者？）、あるいは、自分に益のあるものだけをつまみ食いするような形で参加しているようでもあった?!

また、事情で、今回は「耳だけ」というようなことであろうが、可能な限り、声はともかく、顔だけは出して欲しいと言っても、そうしない人が多かった（分からないわけではないが!）?!

要は、これを機に、参加のみなさんとのつながり、協力関係づくり（情報交換やコラボ事業の起草等）を期待してのそれでもあるのに、なかなかそうしてく

れない?! 挙句には、無記名をいいことに、好き勝手を書く（その後も、何の音沙汰もない!）?!

果たして、こういう人達は、本当に「心ある人」達なのであるのか??

繰り返して言うが、私達（少なくとも今の私）は、給料をもらっての、職務としての研修機会の提供者（例えば行政）でもなければ、参加費を取って、自分達の収益を上げるビジネス事業体でもない!

どんな思い、どんな状態（運営・スタッフ体制）で、このようなセミナーを提供しているのか?そこを、分かって欲しい?!

このように、自分（のところ）のやっていることだけを考えており、このセミナーとか、それを実現させている我々と（今回は、玉城青少年の家と繁多川公民館のスタッフが主であったが!）、今後、どのような協力・参画が可能なのか等の、言わば仲間づくり、ネットワークづくりへの思いや、具体的な提案が、ほとんどないのである?!

今までは、そういうことは、ある意味織り込み済みではあったので（本当は、その都度哀しい、否、悔しい思いをしてきたが!）、ここでは、敢えて、このようなことは書きたくないのであるが、特に、今の私には、そういう寛大な?受け止め方は、したくないのでもある!

しつこくもあるが、今回のような思いとセミナーの開催は、身分や処遇も不安定で（収入も少ない!私の場合はない!）、これをやったからといって、直接は報われない?人達による呼びかけであり、一緒にやりませんか、仲間になりませんかという誘いなのでもある!

そこが分かっていない（否、分かろうとしていない?）?!もちろん、個々の参加者も、土曜日の午前中の開催であるから、自らの参加も、それに類するものではあろうが、今、改めて必要なのは、そうした、各地各様で頑張っている人達の思いの、敢えて言えば広域的な結集であり、そのネットワークづくりなのである（それがなければ、やはり大きな力とならない!）!

余計なことを言うようだが、それは、他ならぬ県の役割（責務）なのだが、それに期待（おんぶにだっこ?）するのは、現状では、なかなか厳しくもある?!だから、「思いのある人」達が、頑張っただけをもらえないのである?!

とは言え、最後になるが、「岳陽チャンネル（教育協働セミナーの後身）」の可能性について、今回のセミナーを通じて、改めて見出させてもらったことも事実である!このことも、一応きちんと書き記しておきたい!

いつでも、どこでも、誰とでも、互いの思いとニーズによって、通信（Zoom交流。電話やメールも、それに含まれる!）が出来るということであるが、今回、そのような意義と、そして嬉しさを、つくづく感じさせてもらった部分もあるということである!

これからも、可能な限り、そして、さらなる意義や可能性を広げるべく、老

体に鞭打って？続けていきたいと思う！

(つづく)

15 「積分（学）」に見立てた「教育協働」の手順?!だが、やはり?それだけでは?!

(1)あくまでも、「積分（学）」は考え方（哲学?）であり、その手順を持続させていくことが重要なのである?!

ということで、ここでは、改めて、先号（14）で書こうと思っていた標記テーマであるが、折角準備していたので、思いも新たに、書き記しておきたい!

ただし、先号で見たように、言わば、この「術学げんがく」的な論は、今やまったく不要な気もすることを、ここでは、予め、そして、率直に名状しておきたい!

要は、最前線で働く「思いの（心）ある人」が、別の「思いの（心）ある人」に出会い、力を合わせて、地道に、そして「元気よく」、その「思い（心）」を実現しようしていけば、そんな理屈なんか、ほとんど吹っ飛んでしまうということである!

多少?複雑ではあるが、本当に素晴らしい!その一言である!

しかるに、先々号（13）では、最後に、これからの「教育（学）」には、まさに「積分（学）」の考え方が必要であるということ、あまりにも突然（突飛?）に出したように思う?!

とりわけ、そこにおける「導関数」とか、「微分係数（傾き）」とか言って（ある意味、ほとんど分かってもないのに?）、結局は、煙に巻いた（自己陶醉した?）ようにもなっているということである?!

そこで、本号では、そのことをもう少し冷静（精緻?）に、そして、そこに、さらにもう一つ重要なことを付け加えることを目的に、さらなる（それなりに意味のある?）論をなしていきたい。そういうことである!

まず、件の「導関数」とか「微分係数（傾き）」とかということであるが、ある最高次数の関数であると見做される?（無数の要因が関係してくる!）「生涯教育（学習）（論）」は、それだけでは、余りにも高次（多面的、多元的?）過ぎて、その完全体は、具体的な数式では表せない（その次数自体は、ある意味無限大?であるので、現実には作り得ない?!そういうことでもある?!）!

しかし、 N （ $N \rightarrow$ 無限大?）次関数というようには表現できる?!要は、数限りない要素（ $N \rightarrow$ 無限大?）が、それに関わっているということであるが、そのためのしくみづくりの手順・関係を発見、持続させていくことが重要だということであり、それが、あたかも、「積分（学）」の考え方（哲学?）と通底するのではないかということである?!

とは言え、ある時期、ある場所においては（前提としては、それぞれの市町村自治体を想定しているが、そこにある、個々の学区/生活コミュニティでもよい?!）、その一定の姿・形は作り得るので（その時点では、具体的な N 次関数となる!）、その実現に向けて邁進すればよいということになる?!

つまり、そのNは、ある意味便宜的ではあるが（その場所・地域においてのみ通用するということ→ $N_1 \sim N_N$ ）、その場所・地域で、全力を挙げて実現すべき課題・目標となるものということでもある（例えそれが低次なものであっても？ただし、それが、その後の取り組みの核となることが重要となる！）？！

であれば、そこで必要となってくることは、それぞれに見出された、言わば「N次関数」（課題目標群 or 計画体系）を、ある時点毎に微分し（その時の「個別課題群」を抽出するということ→それが、「導関数＝ $(N-1)$ 次関数」）を求めることになる！）、その時々具体的な課題・目標を表出させる（共有する）ということである（それが、まさに微分係数（傾き）をはじき出すということとなる！）？！

そして、次に、それに基づいて、数ある課題・目標の中から、ある特定の課題をそこに結びつける（いわゆるXの値を代入するということ→ただし、そこには、無数のXが存在し得るので、そのXは、その時、その場所に最も相応しい値ということになる！）ということである（それが、その時々、つまり、その場所・地域での「解」であるということになる！）？！

(2) 大切なのは、その時々、苦勞してでも、協力して「必要な総和」を生み出し、広げていくこと！

ただし、問題は、ここからである！数学の考え方（積分のやり方）としては理解出来たとしても、実際の課題・目標を、いかに見出していくか（と言うよりは、その課題・目標群の整序化）は、現実的には、かなりの困難が待ち受けている？！

何故なら、そこに見出される課題・目標は、それこそ、人（関係者 or 部署）の数ほどあるわけであり、ましてや、それらは、法制度や、それに基づく組織体系（実施系統）が、基本的にはバラバラであるからである？！

俗に言う、「縦割り行政」の存在であり、各々の存在意義の強固な主張（縄張り意識？）が、大いに、それらを阻害する（かもしれない？）ということである（最前線で、純粋に奮闘する人達、例えばボランティアのような人達には、それらは、大変迷惑な話ではあるが！）？！

とは言え、それは、ある意味では、とても簡単なことなのではある？！積分とか、導関数、微分係数（傾き）とか出しては見たが、それらは、あくまでも数学としての話であり、言わば「後付け（ひょっとしたら「こじつけ？」）」の話でもあるということである！

大切なのは、今なすべきことが何なのかが、ある時点で、関係者（しかもその時々！）に共有されればよいということなのである！

言い換えれば、それで終わりなのではなく、その時々から、新たに生じてくる問題・課題を正しく掴み、そしてそれをまた、同じような考え方、段取りで進めていく（繰り返していく）、そういうことが必要なのだということである！

繰り返しになるが、そうした視点、手順、関係が、ここでいう「積分（学）」

だということであり、その時点、その時点における「必要な（成果の）総和」が、そこに見出されていくということが、大切だということである！

したがって、そうであるならば、そういう小難しい理屈？（積分学）など、実際には不要なのではないかという節もあろうが（実は、本当は、そういうことでもあるが！）、現実には、先にも述べたように、そうした問題・課題の解決手順を踏むことは、極めて難しく、

しかも、それが、究極的には（総論としてはということでもあるが！）、万人が必要と思える「生涯学習体系／生涯学習社会の実現」につながるものだという実感（確信？）が得られるものであるならば、それに勝るものはないと言えるのでもある?!

よく、「持続的な発展」（→SDGs）とか言うように、現実的に持続できる（sustainable）ということが、今や大切な視点、要素なのである（そういう意味では、ここに、その後停滞している？「生涯教育（学習）」論議が、新たな第一歩、否、二歩を歩み始めるとも言える?）?!

(3) 改めて、「必要な（成果の）総和」はあるものではない！だから、（永遠に続く?）英知が必要なのだ！

ところで、最早明らかではあるが（ただし、残念ではあるが?）、その「必要な（成果の）総和」は、最初から「あるものではない」！

つまり、アプリアリ（先見的）に、そこにあるものではなく（理論的／理想論的にはあったとしても?）、その現実体は、関係者達（極論すれば、国民一人一人が?）が、常に冷静に、しかもある時は、言わば歯を食いしばって?、創り出していくものである（その意味で、その完全体は、永遠に現出し得ないものでもある?）?!

たとえその時は、それでよいと思えるものでも、時が経ち、状況が変化すれば、次から次へと、新たな問題・課題が飛び出してくるということでもあるが、人の世は哀しい?もので、取り組み（苦労）における齟齬や仲違い（面子とか、勢力争いも含めて!）は、ある意味常態なのでもある?!

だからこそ、そこにおける一番有効な考え方（対応の仕方）は、そこにある最も大切な要素である「協働」（たとえ、その時は細やかなものではあっても!）、そのプロセス・成果を、常に担保し、継続・発展させていくということである！

けだし、現実には、様々な動き・対応の仕方が出てこよう（対立、乱立しよう?）とも、そのことだけは、まさに「不文律（英知）」として、関係者相互が有しているということが重要であるということである

（例えば、1990年代に、「生涯学習のまちづくり」というような施策・事業が活発に展開されたが、実は、そこにおいて最も必要であったことは、その「不文律（英知）」を明文化（推進大綱・諸計画に明示）することではなかったかと、改めて思う次第でもある?）! !

もちろん、その芽だしや雰囲気は、それなりにあったとは言えるが（教育基本法の改定、特に「第3条（生涯学習の理念）」の新規定が、まさにそうである！）、残念ながら、その具現化のための重要な（ある意味必須な！）方法論、すなわち、『学校教育』と『社会教育』の協働によって、それを実現する」という「不文律（英知）」の明示にまでは至らなかった？！

本当に、残念であるし、悔しいの、一言でもある！

そこで、改めて、最後になるが、この間、様々なこと（多方面での組織改編／名称変更等を含む！）が去来していった（多少懐古主義的ではあるが、今の私からすれば、このような表現ともなる？）！

上記の「生涯学習のまちづくり」、あるいは「生涯学習の理念」の法規定もそうであるが、その後の、文科省並びに地方の教育委員会の組織改編・名称変更等（そこには、社会教育関係者の不満や怒りもあるが?!）、

そして、そこから出てきた「総合教育政策」という方向性、「地域学校協働活動」、さらには、学校教育側の「社会に開かれた教育課程」の登場等（内実は、まだまだ十分とは言えないが？）、かなりの変化が見られるということでもある？！

それ故に、私自身は、大卒では（全体としては？）、それなりに前進しているのではないかとも思っているということであるが（多少、否、かなり誤解を招くかもしれないが？）、

ただ一方で懸念されるのは、いじめや不登校の数が、過去最高という情報もあるが、「教員の働き方改革」の動きにも見られるように、多くの関係者達の苦悩や苛立ち？も、過大なものがある？！

それらを、いかにして解きほぐしていけるのか？しかも、そこに、それぞれの関係者の、言わば「苦勞のし甲斐」があるのかどうか？

そこに、ここで述べた「積分の考え方」、つまり「協働」の真価が問われるということでもある！

ちなみに、私自身は、そうした「苦勞をしている人」のごくごく一部ではあるが（それは、学校教育関係者であろうが、社会教育関係者であろうが、一向にかまわない！

要は、「思いの（心）ある人達」ということである！）、可能な限りの支援、しかし出来るのは、大いなる声援を送るだけかもしれないが、それを続けていきたいということである！

とりわけ、収入や身分の保障もなく、その思い（心）だけで頑張っている人達には（例えば、心細い「指定管理」を引き受け、頑張っているNPO法人や一般社団法人のみなさん達→前号で紹介した、二つの法人のみなさん！）、是非とも頑張っ欲しいと念じている次第である

（本当は、給料も身分も、それ自体には、何の問題もなく、仕事をしている人達に、

頑張って欲しいのではあるが？）！

(つづく)

16 エジプトが教えてくれた？我々の「失敗」?!だが、「レジリエンス」がある?!

(1)二つの「偶然？」が、一つの「大きな奇跡？」を生み出した?!

昨日と一昨日（10/26～27日）、奇妙な、そして、かなり面映ゆい？出会い（一部再会！）、しかし、貴重な（大いに刺激を受ける？）情報入手、否、新たな論考意欲へと誘ってくれる機会があった！

それは、何とエジプトの人達との出会い、情報交換のことである（あるプロジェクトの実行者達と、それと協働しようとしている大学の関係者達との会議&セミナー?）！

そこでここでは、是非、そのエジプトの人達のプロジェクトがどういうものか？そして、彼らは、何をしようとしているのか？その立ち上げの経緯も含めて、改めて紹介（以前、少し紹介したことがある!）、それがもつ意味（示唆?）と、我が国への逆輸入?の可能性について書いておきたいと思う！

実は、これが、今回の新たな論考への誘いということでもある?!

なお、今回来日／来沖していたのは、中心人物アブデルミギードさん（略称ギドさん。奥さんは沖縄の人。）と、仲間のバサントさん、ラニアさん（3人は同僚）、そして、アインシャムス大学のハニーさんとマイさん（教授と准教授?）であった！

一日目は、県の生涯学習推進センターでの、県教委とのディスカッション（生涯学習振興課及び生涯学習推進センターの取組紹介等を交えた情報交換。私を含めた3人がオブザーバー?参加）。

二日目は、那覇市繁多川公民館での、「ソフトとしての公民館的場づくりとコーディネーターの意味と展開」というテーマでのズーム交流であった（会場参加とオンライン参加のハイフレックス方式!何と、エジプトとも繋げた交流でもあった!しかも、当該大学の学部長?の参加もあった!したがって、本気?であることが分かる?!）。

ということで、エジプト（の彼ら）のプロジェクトとは、具体的にはどういうものか？

簡単に言えば、彼らは、現在、エジプトで2番目の規模をもつ「国立アインシャムス大学」の教育学部において、我が国で言うところの「社会教育主事」の資格付与（「社会教育コーディネーター?」の養成）を計画しており、日本における経験とアイデアを求めるべく来日／来沖しているということであった（この企画自体は、かのJICAの支援事業ともなっている?）！

ちなみに、それは、これから述べるように、私にとっては、甚だ複雑な思いを抱かせるものではあるが（それが、ある意味、冒頭の「面映ゆい?」ということである!）??

まあ、それはともかく、彼らの来日／来沖の目的は、上記のように、彼らが目指すべき、その「社会教育コーディネーター?」の活躍の場所としての「公

民館」(エジプトでも立ち上がっている!)、そして、それが位置づけられている「社会教育(行政)」の実情を視察することであったということであるが、

実は、今回の動きと、そのきっかけ、そして、その来日/来沖のお手伝いをしているのが、沖縄県那覇市の特定非営利活動法人(NPO法人)「1万人井戸端会議」(那覇市繫多川公民館指定管理受託者)なのである!

以前にも紹介したように、彼らは、偶然にも出会った、エジプト人アブデルミギードさん達と一緒に、「エジプトにおける教育イノベーション創出事業」を始めようとしているわけである。

思うに、私が、かつて(10年前?)、当時留学生であったギドさんを、ゼミ活動の一環で同公民館に連れていったこと、そして、そこで、現館長のMさん達と意気投合?し、その後の交流を行ったことが、遙か異国のエジプトに、「日本の公民館」のようなものを創ろうというビッグプロジェクトにまで発展していったということである!

それは、まさに二つの「偶然?」が、一つの「大きな奇跡?」を生み出したということでもある?!そういうことである?!

**(2) 改めて、ここでは、何が重要か? 「失敗?」「レジリエンス?」、それは、
どうということなのか?!**

さて、そこであるが、これらの話の文脈において、改めて、我々の「失敗?」とは何か?そして、そこでの「レジリエンス?」とは何か?そのことを、説明しておかなければならない!

それは、単純に言うと、我が国の国立大学(厳密に言うと、そこにおける教育学部ないしは、それに相当する学部ということ!)における「社会教育主事養成(資格付与)」の失敗?ということである!

ただし、現在においても、新たなカリキュラムの下でそれを実施している大学もあるので(いわゆる「学芸系教育大学」?もちろん、公立、私立大学は、この限りではない!)、必ずしも失敗ということは出来ないのかもしれない?!

であれば、この場合は、私が勤務していた琉球大学教育学部のことを念頭に置いて話を進めていくことになるが、それは、折角立ち上げて(現有スタッフ等をやり繰りして)、それなりの成果を挙げていたと思われる、

いわゆる「生涯教育課程」等、教員養成課程以外の「課程」「学科」(当該大学で、それぞれ創意工夫をして立ち上げていた!)が廃止されたということであり、そこを中心にして行ってきた「社会教育主事の資格付与(養成)」を止めた(止めざるを得なかった?)ということである!

ちなみに、その「生涯教育課程」等(それらは、世間?からは「ゼロ免課程」と揶揄されていた?)は、決して教員養成を行わないというものではなく、従来の、タテ型の?教科毎の教員養成ではなく、新たな課題に対応できる教員の養成、あるいは「社会教育主事」等の、広い意味での教育関係人材の養成を意

図するものであったが（教員免許は、表向きは卒業要件ではなかったが、その取得はもちろん、他の教育関係人材の資格取得も組み込まれていたもので、私自身は、「ゼロ免課程」と呼ばれることに憤慨していた！）、

何故か？余分なもの、あるいは余剰？教員の隠れ蓑みたいなものと断罪され、ある時期一斉に消されてしまったということである（国立大学の「ミッションの再定義」という名の下に！）！

しかるに、琉球大学のような、地方の国立大学の多くは、このような状況になってしまったわけであるが、さらに運悪く、当地においては、琉球大学だけが社会教育主事資格付与の任を負っていたので、これを期に、沖縄県全体で、大学での当該資格の取得は出来なくなってしまったのである！

しかも、それが、直接の担当者であった私がいなくなるということが原因？であったわけであるので（退職、しかも早期！）、その「失敗？」の無念さは、二重の意味で甚大なものであったということでもある？！

それが、ひょんなことから、エジプト（人）が、日本の社会教育、とりわけ公民館の存在意義と可能性に感じ入り、自国に、そのシステムを構築したいということで動いているのである！

私にとっては、何と言う皮肉？なのかとも思うが、そのノウハウや経験を教えて欲しいということで、出会いの生みの親？でもある私が、今回の集まりに呼ばれたということである！

しかし、そこには、かの「レジリエンス？」が期待される？！否、そうでなければいけない？！そうも思えるからこそ、今回、協力を惜しまなかったのである？！

(3) まだまだ？諦めてはいけない！そこには、「レジリエンス resilience」（復元力？）がある？！

では、改めて、その「レジリエンス」であるが、その本来の意味は、「弾力」や「弾性」といった物理学の用語である！

だが、それによって「元通りになる（する）」ということで、一度は失敗したけれども、その大切さに気づき、それを元に戻そうとする、社会の意識や力ということであれば、「復元力」ということにもなり、何か、そこから新たな可能性が期待できるかもしれない？！

つまり、今回の、エジプト（の人達）からの逆照射？によって、私達が無くした？ものを、今からでも遅くない？取り戻そうということである？！

翻って、改めて、教育には、「学校教育」と「社会教育」の両方が必要であり、その双方の力と成果を融合し合うことが求められる！

まさに、「ひとづくり」と「まちづくり」の双方の要素が必要だということであるが、それは、今回の世話役「万人井戸端会議」の紹介文にも、端的に示されている！

すなわち、彼らは、「社会教育の視点で1万人規模の地域と学校でまちづくり」を行うことを目的にしており、「地域文化と歴史を掘り起し誇りと生きがいを高めながら、世代を結びつけることを得意としています。その地域力で1万人規模の生活圏で教育や福祉の課題を解決するしくみづくりに取り組んでいる」ということである。

とは言え、そのためには、それを実現させる人材、とりわけ「コーディネーター」の養成と、彼らの働く場所（給与／身分の保障を含む）が構築されなければいけない（我が国の、この場合は国立大学の失敗は、詰まるところそこに起因する！今回、最も衝撃的な情報となったが、エジプトでは、いわゆるNGOが各地に配置され、そこには多くの寄付金が集まるという！そこに、その「コーディネーター」の配属を考えているということである！）！

かなり壮大なことを述べるようであるが、現在、改めて「教育全体」のあり方が模索されている（再構築されようとしている？）が、ここでのエジプトの思いと動きは、それに対する、大いなる示唆となるのではないか（ただし、このことは、潜在的には、古今東西、絶え間なく構想されてきたとは言えるであろうが？）？！

このように、今回のギドさん達、とりわけ国立アインシャムス大学の関係者のみなさんの思いと企図は、私にとっては、誠に複雑な思いをもたせるものではあるが、やはり私の思いは間違っていなかった！

冷静に考えれば、そういうことは、どこの国においても、ある意味当然のこと（自然の摂理？）と思う次第なのでもある！

目下、我が国においては、教員の働き方改革等、多大な課題と、そのための予算措置（捻出？）の必要性が叫ばれているが、エジプトの方は、NGOや、それを支える社会の力があるだけに（ムスリムの教えのようだが、国民の多くが、多大な寄付金を寄せるしくみがあるということ！）、正直かなり癪でもあるが？、大いなる期待がもてそうなものでもある？！

我が国においても、結局は、予算（カネ）、そして多くの関係人材が、それで飯が食える（生涯の仕事としてやれる）?!そこが、重要であったということである?!

最後に、思い出すのは、当時教育学部長として、全国の教員養成系の大学・学部の長の集まりで（確かその会議は、「文科省」と共催であった?!しかも、それは、例の「ミッションの再定義」が進行していた最中でもあった!）、私が、意を決して、生涯教育課程の意義、新たな教育基本法体制下での教育の在り方、したがって、教育学部のあり方、方向性について話をさせてもらったことである！

（極？）一部の人間からは、後から賛同・称賛の声も頂いたが、何せ、そこには、最早既定路線が敷かれていたらしく（財務省の意向?）、私の、その歴

史的演説？は、徒勞（あだ花？）に終わった（今となっては、懐かしい武勇伝とは言える？）？！

果たして、それはどうなのか？そこに、かの「レジリエンス」が働き始めていると思いたいのであるが…

（つづく）

17「PTA」もか！いたるところで噴出している？「教育協働」への新たな契機？！

(1) 現役高校教諭が提訴！ついに、ここまできたのか?!「PTA」よ！どこへ行く（彷徨う?）?!

子どもの親ともなれば、誰もが経験するPTA！そして、そのあり方については、誰もがおかしいとは思いながらも（特に役員選出に関わって!）、ここまで続いてきているPTA！

そんな中、次のような新聞記事が、ネット上に見出された！「PTA会費の返還求め提訴 現役教諭が投じた『一石』、学校に驚きと共感 『加入は暗黙の了解』『エアコン設置費に充当おかしい』」（南日本新聞）。

とまあ、こんな見出しであったが、そのあり方はともかく、ここでは、現役の教員が、会費の返還訴訟まで起こしたことが驚きであり、PTA問題が、「ついに、ここまできたのか？」ということである！

そこで、まずはその経緯であるが、「同意のないまま給料からPTA会費が天引きされていたとして、鹿児島市内の県立高校に勤める40代男性教諭が、校長と元PTA会長に会費の返還を求める訴訟を起こした。PTA入会や会費を巡り、教員が提訴するケースは珍しく、学校関係者に波紋が広がる。

訴状などによると、男性教諭が返還を求めているのは、着任後6年分の会費1万6560円。この間、加入の意思を確認されずに給料から引かれていたと主張している。

これに対し元PTA会長と校長は答弁書で、教諭が6年余りの間、会費が明記された給与明細書を毎月受け取りながらも異議を唱えていなかったと反論。『会員であることを少なくとも黙示的には承認していた』としている。

『これまで払わないといけないものだと思い込んできた』と男性教諭は振り返る。だが、長男の小学校入学を機にPTAへ疑問を抱くようになったという。『PTAに入るのが当たり前という現状に一石を投じたい』と、裁判を起こした意図に理解を求める。」とある。

さらに、「学校に必要なものには公費を：県内の学校関係者は戸惑いを隠せない。ある公立高校の管理職によると、着任した教員にPTA加入や会費天引きについて意思を確かめたことはないという。『新学期の事務作業は多忙。加入する前提で処理してきた』と明かす。

小学校の管理職は『保護者との信頼関係を築く場で、入るのが当然だった。今後は意思確認が必要な時代になるのでは』と受け止める。

一方、現場には驚く声だけでなく、共感する意見もある。『そもそも入会申込書がないのがおかしい』。40代高校教諭は、数年前からPTAに入っていない。

教諭は、学校のエアコンの設置費や管理費にPTA会費を充てている例を挙

げ『学校に必要なものは公費でまかなうべきだ』と、使われ方を疑問視する。

(また、『加入は暗黙の了解。入らない選択肢を考えたことはない』と 50代小学校教諭。『運動会の設営や通学路の草刈りを手伝ってもらっており必要な存在』と感謝する。ただ活動内容については『会合はリモートでもできるし、緑門作りなど見直していいものもあるのでは』と漏らす。)とある。

そして、これに関わって、「学校の下請けのような業務：企業などの組織論を研究する同志社大学政策学部の太田肇教授は『P T Aが任意団体である以上は加入の意思を確認する必要がある、結果として未加入者や退会者が出るのはやむを得ない』と指摘する。

太田教授によると、半ば強制加入となっている日本に対し、米国では地域住民がボランティアで参加できる例も多い。日本に比べてオープンで、活動内容も柔軟に見直すという。

『学校の下請けのような業務を返上し、子どものために意見を言う場になった例は少なくない。日本でも、自発的に参加したくなる組織へ変革していく必要がある』と提言した。」ともある。

次に、「私はこう考える：県P T A連合・太田敬介会長 ◇任意か強制か…二項対立で考えるべきではない ◇

テーマは多様性、自分にできることの模索を」ということで、「(教員の提訴について) 裁判が進められている事案なのでコメントは控える。教育の課題が多岐にわたる中、学校だけに任せるのではなく、家庭が一緒になって解決していこうというのがP T A。保護者と教員の信頼関係は何よりも欠かせない。

今後も活動の本質を理解してもらい、協力していただきたい。P T Aは、戦前を反省して、民主的な教育で平和な日本をつくりたいという思いから全国に広がった。誰か一部の人が担って大変な思いをするのではなく、みんなで少しずつ力を出し合おうと全員参加型のルールができた。

携わる人がどんどん入れ替わるので、ルールを見直す機能が働きにくくなり、前例踏襲やルールを守ることが目的化してしまうこともあるのかもしれない。」

そして、「あくまでも教育を目的とする活動なので、やりたい人だけがやればいいというものではない。

はじめは負担感があるかもしれないが、参加してみたら教員と保護者が話す機会になったり、保護者同士で仲良くなって子育ての悩みを相談できたりもする。P T Aは民主的に話し合い合意形成してきた。組織がどうあるべきかという議論は積極的にやるべきだが、任意か強制かという単純な二項対立の構図で考えるべきではない。

人の考え方が多様化する中、P T Aへの関わり方も『多様性』が大きなテーマになる。それぞれが自分にできることを模索することが大切だ。」というコ

メントで締めくくられている。

(2) これに寄せられた、多種多様なコメント！そこに、見出されるべき解決策も多々ある?!

ここで、私なりの感想や意見を述べるのも、当然ありだが、今回は、以下、これに関わる多種多様なコメントを掲げてみたい(※一部、手直しあり!)！一部の紹介しか出来ないが(何せ大量に寄せられている!)、貴重な意見や情報提供もあり、そのほとんどが、今回の事案を考える場合の基本的な示唆ともなっている!

○PTA本部(役員?)になり、大改革を行い、PTA活動を大幅に縮小し、保護者の負担を無くした。やりたくない人は何もしなくて良い。ほとんどの会員が何もしない。加入も任意で退会したい方も気軽に退会可。教員の方々にも説明しお支払いも教員の方が加入するのであればご自分でお支払いする形。今はやりたい人が子供たちのために緑化整備をしたり、登下校の見守りをしている。登下校の見守りは当番制を辞めたら自主的に行う方が増えた。すぐにPTA全てを無くすことは難しいが、少しずつでも改革し今の時代に合った、又その学校に適した形にしていくことは出来る。但し、そのためには誰かが立ち上がり相当な努力、時間を使わなければならない。私の時は本部全員と校長教頭が大変苦勞した。精神的にも辛いこともあった。が、変えた方が良いと思うなら、是非行動すべき。批判するだけでは何も変わらない。

○これはPTAへの参加、運営を「権利」と捉えるか、「義務、役務」と捉えるかによって全く違って来る。このような疑問や不満は教員、父兄とも皆が「義務、役務」と捉えているから起きる。PTAの発祥の米国では教育を政府だけに任せず教職員、父兄が積極的に関与して学校を市民目線で運営していく為の教育への参加権利として捕えている。元々、南西部の開拓時代の自助自立、独立の精神がPTAの精神の根っこにあるように思う。米国では連邦政府が学校へ直接助成する事も憲法で禁じているとも聞く。教育は市民の手で育むもの、連邦政府の勝手にはさせないぞ!との意気込みが聞こえてきそう。そんな米国の開拓精神に裏打ちされたPTA制度が、教育はお上から与えられるもの(お上の義務)としてずっと刷り込まれてきた日本には本来馴染まない制度だったのかも。その精神は見習うべき点多く、ある意味教育における一つの理想の形なのだろうが…

○子供会、町内会、部活動、PTA…昔からあるのが当たり前 そういうものを見直す時期に来ている。

○こういう記事が出ると必ず必要ないと言い出す人が一定数いるけど 本当にそうなのか?と疑問に。自治会などもそうだけど、組織の活動内容等を見直し、より良い活動が出来るように皆んなで考える事とただ単に要らないと切り捨てるのは違う。私はPTAの役員もやってきたし、自治会の役員もやっているが、どちらも必要な組織だ。必要な組織としてより良い方向にすすむといい。

○親はボランティア的な意味合いが強いけど教員は追加業務でしかないわけで、言われてみれば確かに可哀そうだなとも。ここ数十年の不景気により、親の絶対的な忙しき \leq PTA活動だったのが、親の絶対的な忙しき \geq PTA活動になってしまっているのが問題。さらに行政もお金がないから手が回らないところをPTAに丸投げしようとしている。いろいろと問題が山積しているけど、子どもを守る目を増やすためにもPTAは無くさない方がいい。一度無くすともう戻すのは不可能に近い。個々人の適材適所の仕事を回して長時間の拘束を無くして、活動できない(したくない)親には若干の金銭負担をいただき外注できるところは外注する、これだけでも大きく変わる。

○PTA=Parent-Teacher Associationなので建前としては親も教員も全員加入することが前提になってると思うけれど、必要なことは公費でやるべきという議論と、欧米では、ボランティアが活躍している(ならば公費化の議論は関係ないのでは?)、という話がバラバラで散らかってる。エアコン設置費に充当することは論外だと思うけれど、少子化・共働きが当たり前になって、みんな余裕がなさすぎて、民主的に議論する場だったはずのものが、バザーの開催とか無駄な事業に労力を取られて形骸化し、存在意義を失ってしまっている。いったん「先生と保護者が茶のみ話をする会」みたいなライトなノリで、仕切り直すことが必要かも。

(3) いずれにしても、これもまた、新たな「教育協働」へのステップとなって欲しい!

改めて、多少粗っぽいコメント、提案もあるが、すべてが納得のいくものばかりである!この訴訟の行方については、個人的には何とも言えないが、問題がここまでこじれてきている(個別先鋭化?してきた)わけなので、やはり何らかの、つまり汎用性のある解決につながる判断がなされて欲しいものである!

もちろん、そこでは、「加入の任意性」というものが大きな争点となっていることは明らかなので、その点が、どのように解釈されていくのかは注視されていくべきであろう!

ただ、そこで、「入る入らないは個人の自由」ということだけで終わってしまうのは(「返納の是非」だけで終わるかもしれない?)、余りにも近視眼的で、「教育協働」の新たな形を模索・唱導してきている私にとっては、はなはだ遺憾であることは言うまでもない!

そこには、少なくとも、現在全国的に進められている(多少衰退しているところもあるかもしれないが)「CS(コミュニティスクール)」や「地域学校協働本部事業」との関わりや、「G(祖父母)PA」や「PTC(コミュニティ)A」というような形・呼称で、知恵や力を合わせてきた取り組みもある!

止める止めない(or要不要)で終わるだけでは、何も生まれなし、さらに学校や地域のあり様に悪影響をもたらす?!そのことだけは、残念ながら、明白である?!

教員の働き方改革、部活の地域移行、「社会に開かれた教育課程」の実質化 etc. すべてが、関わっているのである（まさに「変革」は必至だということである！）。

最後に、何ともやるせない思いが募る記事ではあったが、いずれにしても、起こるべくして起きた事案であることは間違いない！

とは言え、本記事は、この事案が有している現状の問題点や課題を、それぞれ適切に、そして多面的に示しているようにも思える！ある意味、流石である！

現実問題として、この裁判？がどのようなようになるのか？そしてまた、これを機に、どのような展開が生まれてくるのか？軽々には述べることは出来ないが、ここでの「PTA問題」が、次なる大きな一歩を創り出していく大きな契機となって欲しい！その様相は、確実に見出される?!そう思うのでもある！

(つづく)

18 敢えて「教育の未来」としたい?!そこには、どのようなしくみが必要なのか?!

(1)求められるのは、「F E ≡ 学校教育」と「N F E ≡ 社会教育」の有効な組み合わせである?!

本号は、不定期の発行とは言え、今年（2023年）最後の論稿となる!

とにかく、これまで、ほとんどまとまったテーマはなく、その時々には浮かんできたアイディア（想い）や話題となっているトピックに絡ませて、新たに「新・教育協働への道」と題して、これからの「教育」全体のあるべき姿や改めての課題を、過去の論考・実践を踏まえながら、自分なりに論じ、再構築?しようとしてきたわけであるが（だから、かなりの重複もある?）、

ここに来て、それらを、可能な限り超克できるような論考にしたいと思う次第である!「敢えて『教育の未来』としたい?!」としたのは、まさに、そのためである!

と言うのも、時は、刻々と過ぎ去っているのであり、その時々々の論考には、それなりの意味があったとしても、その後の、それに基づく有効な「新・教育協働への道」を指し示し切れているのかどうか?否、実は、その意欲自体が、徐々に減退してきているのではないか?そんな風にも思える（机上の空論は、いくらでも積み上げられるのだが?）!

だから、今、何としてでも思いを奮い立たせ、この先を見遣る力強い?ヴィジョンを考究していかなければならない!しかも、それは、他でもない「自分のために」!

どこまで、そしていつまで、それが出来るのかは、それこそ何とも言えないが、自らの生き様を貫徹するものとして、それをやり遂げなければならない!他方では、そうも思うということである（たとえ無様な美学?であったとしても…）!

そこでであるが、まずは、改めてここで確認したいことは、その「教育の未来」には、まさに「F E (formal education) /フォーマル教育」と「N F E (nonformal education) /ノンフォーマル教育」（英語表記で申し訳ないが）の有効な組み合わせが必要であるということであり、それを実現するためのしくみづくり、そして、それを担い、実現していく人材（人財?）の養成（発掘?）をいかに行うのかということである!

もちろん、これについては、これまで再三述べてきたわけであるので、今更何をとられる部分もあるかと思うが、絶え間なく現出する、現今の多種多様な問題・課題を見るにつけ、その解決（軽減?※すべての解決は、一度には無理である!）策は、この考え方、この方向性によるものしかない、と改めて思うということである!

若干砕けて言えば、それが、「直感（予感）から実感へ」と変わってきたと

いうことでもある?!

ちなみに、これも繰り返すように、そのような考え方、方向性は、ある意味では「人間社会の原初状態」に戻すということにもなるが（未分化→分化→回帰?）、しかし、それは、当然ながら、単純な回帰ということにはならない!

幾多の先人達が創った（失敗や反省を含む!）、我々人間社会の一つの大きな叡智（近代教育制度）を、新たな視点、新たな取り組みで作り変える! ということなのでもある（制度の再設計?）!

だから、これまでなかった、「F E」と「N F E」の「意図的な組み合わせ（融合）」ということが俎上に上ってくるのでもある（ただし、もちろんそれは、その土台としての「I F E（informal education）/インフォーマル教育」や「I L（incidental learning）/偶発的学習」の意義や成果をよりよいものにしていくためでもある!）!

しかるに、理の当然ではあるが、すべての教育（学習）は連動しているものであり、そこでの「総和」が、他ならぬ「教育（学習）の成果」!そして、その「総和」の「最善値」（決して量ではない!）は、「F E」がもっている「メリット（統一性）」と「N F E」がもっている「メリット（多様性）」を、最大限有効に組み合わせることから生まれるということである!

しかし、それは、単なる「ノスタルジア（郷愁）」ではなく、基本原理に回帰はしても、明らかに、それを実現する知識・技術体系は異なっているのであるから（→高度化・専門化）、それ故に、多くの関係者の多面的・継続的な知恵と協力（合力）、そして、おそらく新たな「自覚」が求められるということでもある!

私は、それを、「誰かがやらなければならない、だが難度の高いミッション性」と呼んでおきたい（やりがい、使命感とも言えるが、それだけでは関係者に申し訳ない?）!

(2) 社会的な課題としては、それは、「統一性」と「多様性」の問題となる?!

ところで、これに関わって、今改めて思い出すことがある!それは、私の、最初の「教育（研究）」の関心テーマが、「連邦国家（当時の西ドイツ）における『教育制度の統一性と多様性の問題』」ということであったということであるが、何故か、そこにつながっていくような感じでもあるのである（もちろん、それは、現在抱いているような「課題意識」とは、ほとんど結びついてはいないが?）?!

その理由としては（無理に結びつける必要はないのであるが!）、やはり「教育」の課題（否、実際は教育に限らず!）は、最終的には、それをどのように受け止め、制度（システム）として、どのように解決していくのかが問われるわけであるが、

実際には、課題の受け止め方や解決の仕方には、それぞれの人／集団による価値観や問題意識の違いによって大きなズレが生じ（時には「対立」や「抗争」

を生む!)、折角の思いやエネルギーが、なかなか一つにはまとまらないということである(そんな光景を無数に見て来た?)?!

「そんなことは、事の本質ではない!」、あるいは「教育には、そのような諍い?はない!否、あってはならない!」と、軽く一蹴される(嘲笑される?)かもしれないが、実際は、そうした局面、対立関係は数限りなくあり(人の世の宿痾?)、多くの、貴重な思いやエネルギー(そして、お金も!)が無駄に注がれ、そして、費えさって行く?!

何とも口惜しく、そしてまた哀しい限りなのであるが、そこに、私の言う「統一性」と「多様性」の問題が、抜き差し難く関係しているということにもなるわけである?!

少し次元は違うが、例えば、そのことは、かの懐かしい、学校の教室での授業風景にも関わってくる?!

すなわち、そこでは、一人の授業者(教員)が、子ども達に、良かれと思った授業プランを準備し、それに基づいた指導・助言を行っていくわけであるが、最初から、子ども達の「多様性」を尊重するという一方で、この授業に参加するかどうか、あるいは参加したい活動だけ参加するということを、予め子ども達と話し合いながら(子ども達の意に任せながら)やっているとしたら、おそらくほとんどの授業は成立しない!

しかも、そこには、一方では、ある場所で、ある授業を受けるという形が保障されていなければ(授業や教室の選択は可能であっても!)、子ども達の多様性どころではなくなる(多様性自体が発揮できない?)!

これが、いわゆる「学校教育の強制性」にもつながっていくわけであるが、それは、ある意味では(冷静に捉えれば!)、「統一性」のメリットということにもなる(特定の教科書の使用も、当然これになる!)!

(3)「教育(研究)」は「大宇宙」か?それとも「小宇宙」か?部分的、局所的な対応だけではだめなのだ!

いずれにしても、この「統一性」と「多様性」の問題は、その局面ということでは至るところにあり、それぞれを、単純な「是非論争」で終わらすことは出来ない!

しかしながら、近年では、「多様性の尊重」の名の下に、その指向がかなり強く(過度に?)なっているようにも思える(その理由自体は、よく分かるが!)?!

「生物多様性」とか、あるいは他ならぬ「人の生き方の多様性の実現」が、それに拍車をかけているわけであるが(そのこと自体は、それを軽視あるいは破壊してきた人間社会の責任であるので、最大限実現されなければならない!)、だからと言って、ここで言う「学校」という歴史的発明品は、そのあり方には、様々な工夫や改善が必要だとは言え、「多様性」の名の下に、それ自体をなくすことは考えられないのである?!

ただし、こうした「統一性」と「多様性」の問題を内在させながらも、厳しい現状を打破し、斬新なしくみづくりあるいは取り組みを、様々に行ってきたような学校、そして、地域があることは、この論稿シリーズでも紹介してきたように（そのうちの一部ではあるが?）、周知の通りである！

ここでは、再度、その事例を追うことはしないが、それらは、その学校、地域なりの「創意工夫」の賜物であることは言うまでもない?!

要は、どこ／何に、確固たる「統一性」が必要で、その一方で、どこ／何に、有用な「多様性」が必要なのかを、多くは試行錯誤を繰り返しながらであろうが、「思いをもった関係者達」が、

その都度の状況を冷徹に捉え、可能な限り用意周到に、それらを実現していったということであろう（当事者達は、明確に自覚していないかもしれないが、そこには、私の言う「FE」と「NFE」の有効な組み合わせが実現している?）!

そこでここで、再び突然だが、昔大学院に入学仕立ての頃、ある教授（確か? 日本東洋教育史のI先生）が、「『教育（研究）』は『大宇宙』か?それとも『小宇宙』か?」という謎かけ?、そして、「『制度』は『思想』の反映なり!」と言われていたことを思い出す!

当時の若き院生達（否、準備不足の私!）には、その意味するところは、ほとんど理解不能であったが、妙に、この歳になって、そのことが受け入れられる?!

今私が思っていることは、ひょっとしたら、そのことと同じなのではないかとも、勝手に?思うのであるが、言わんとするところは、「教育（研究）は、それ自体で閉じてはダメなのだ!」ということなのではないか?!

軽いタッチで聞き流すと、ある種の「哲学的戯れ」のような気もするが、深層にある真実?は、今となっては大いに首肯できるということでもある?!

私の勝手な解釈（流用?）かもしれないが、「小宇宙」としての「学校教育」、「社会教育」は、その双方の交わりによって、まさに「大宇宙」となる!そして、それを支える教育制度の再構築が必要となる!

その一つの例が、「国家と、そこにおける教育制度の統一性と多様性のあり方」の問題として、「連邦制と個別国家（Land/州）のあり様」（関係）があるということでもあるが（ちなみに、西ドイツは、その後統一ドイツとなったが、今でもその問題構図は存在している?）、

大きな枠組みとしては、「全体国家（連邦）」が「統一性」を保障し、それぞれの「個別国家（Land/州）」が「多様性」を享受するということでもある?!

これもまた、ここでの「大宇宙」と「小宇宙」の譬え、そして、「『制度』は『思想』の反映なり!」ということに組み入れることができようが、事程左様に、教育は、まさに「大宇宙」と「小宇宙」、そして「思想」と「制度」の有効な組み合わせによって成り立つのであり、

これはまた、学校教育と社会教育、あるいはそれとほぼ同義語の「F E / フォーマル教育」と「N F E / ノンフォーマル教育」の有効な組み合わせ（合力形成⇔融合／積分）を求めるものともなるということである！

(つづく)

19 「課題」は見えているし、共有もされている?!だが、その先にあるものは?

(1) 「社会教育人材の養成及び活動促進の在り方について」を見る! 「課題」自体は共有されている?!

恥ずかしい?話ではあるが、ここ(「新・教育協働への道」)での論考においては、新しい年を迎えても、なかなか書くべきテーマを見つけられずにいたが、過日、学会関係の研究会(生涯教育学会内「生涯学習実践研究所」主催/オンライン開催)に参加申し込みを行ったら、当日(16日)の発表者(文科省総合教育政策局地域学習推進課長T氏)の使用資料(当該文書と「概要版」/メール添付)が送られてきた。

タイトルは、「中教審生涯学習分科会社会教育人材部会の中間的まとめについて」ということであったが、ある意味それは、私が近年来主張してきたこと(「社会教育主事」と「社会教育士」との協働のしくみづくりの必要性)と、まさに軌を一にするものであった!

やはり、「課題」は見えているのであり、共有されてもいるのである!したがって、今後の推移が注目されるのであり、期待も膨らむということである?!

そこで、ここでは、折角でもあるので、その文書(「中間的まとめ」令和5年8月)について、少し見ておきたい(※「的」という言い方が微妙であるが?)!

ただし、本文自体は、かなりの頁数でもあるので、以下、「概要」を下に、その大枠を示していきたい。

大きくは、三部構成となっており、「1. 社会教育人材を取り巻く状況等に関する認識」、「2. 社会教育人材部会におけるこれまでの議論」、「3. 社会教育人材部会における今後の検討事項」となっている(※以下、適宜文章改変・省略あり)。

まず、最初の「1. 社会教育人材を取り巻く状況等に関する認識」であるが、(1)「社会教育士」創設までの主な議論(2)第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理(3)今後の生涯学習・社会教育の振興方策(4)社会教育人材部会の設置と本「中間的まとめ」の位置付け ということ、そこでの認識がそれぞれ示されている。

その認識の概要(ポイント)は、以下のようなものである。

- 地域の核となる学校教育と社会教育との連携による、世代を超えた地域のつながりづくりや次世代の育成の進展
- 福祉・農村振興・防災・まちづくり等の分野での「地域コミュニティ」に着目した施策の展開と社会教育との連携の重要性の増大
- オンライン化の進展や、社会の構造的な変化によるリカレントやリスキリングの学習ニーズの高まりなどの社会教育のフィールドの広がり → こうした社会教育の裾野の拡大を見据え、地域コミュニティにおける学びを基盤とした自律的・持続的な活動の促進に資する社会教育の専門性を有する

社会教育人材が果たす役割は大きい

- 他方、社会の様々な行政分野において社会教育との連携が模索されているのに対し、社会教育主事の配置率は5割に満たない。社会教育に対する興味・関心や期待を持っている人々のニーズに着実に応え、より多くの人々が社会教育活動に当事者として参画し、学び教え合う状況の創出が必要 ⇒学びを基盤とした社会教育活動をオーガナイズできる専門性を備えた社会教育人材の質的な向上・量的な拡大が極めて重要

総合すると、「社会教育人材をハブにした人づくり、つながりづくり、地域づくりの実現」ということになるが、まったく異論はない！特に、「社会教育人材をハブにした…」は、大いに共感するものである！

(2) 社会教育人材に関する施策の基本的な方向性

次が、「2. 社会教育人材に関する施策の基本的な方向性」であるが、(1) 社会教育人材を取り巻く状況等に関する認識 (2) 社会教育人材に関する施策の基本的な方向性 (アイウの2項目/ウでは2つの小項目別) (3) 社会教育人材の養成に係る具体的な改善方策 (アイウエオカの6項目) となっている。

「概要」では、それらを包括的に整理した形で(「2. 社会教育人材に関する施策の基本的な方向性」)、「地域社会の様々な場で活躍する社会教育人材の確保」、「社会教育主事・社会教育士の役割の明確化と配置促進」(「社会教育主事」と「社会教育士」の双方の役割表示の下に)、「社会教育人材に求められる能力・知見等とその養成の在り方」が挙げられ、

その後、「社会教育人材の養成に係る具体的な改善方策」として、「社会教育主事講習の定員拡大」「多様で特色ある受講形態の促進等による受講者の選択肢の拡大」「社会教育主事養成課程における取組」「講習等の質の更なる向上に向けた各機関の取組の共有」「社会教育主事講習の受講資格の明確化」「社会教育に関する民間資格等取得者の一部科目代替」が示されている。

なお、「地域社会の様々な場で活躍する社会教育人材の確保」では、「社会教育が社会基盤としての役割を幅広く果たしていくためには、教育委員会事務局や社会教育施設はもとより、首長部局やNPO等の多様な主体が担う社会の幅広い領域において、社会教育人材を確保することが不可欠。

多様な分野で活躍する社会教育人材を幅広く確保することは、相互の支え合いや組織的な教育力の発揮により、それぞれの活動の活性化だけでなく社会教育全体の振興にも資する ⇒幅広い人材にとって受講しやすい社会教育主事講習の実現が社会教育振興施策全体の基盤に」。

また、「社会教育主事・社会教育士の役割の明確化と配置促進」では、まず「社会教育主事」について、「地域全体の学びのオーガナイザー」として、「首長部局等が担う福祉や防災等の多様な分野と社会教育(行政)をつなぐこと等により、社会教育の行政及び実践の取組全体をけん引し、地域全体の社会教育

の振興の中核を担う」。

次に、「社会教育士」については、「**専門性を様々な場に活かすオーガナイザー**」として、「現場レベルの活動において、各々の専門性と社会教育の知見を活かしながら、それぞれの分野の活動を活性化させたり、その意義を深めたりする」。

そして、その双方は、「社会教育の裾野の拡大を踏まえると、地域における社会教育全体を俯瞰し、その調整を職務として担う社会教育主事の役割の重要性が高まっている。地域の社会教育人材がそれぞれの専門性と相互のつながりを活かして活躍できるよう、

社会教育行政の専門職である社会教育主事が地域の社会教育人材ネットワークを構築・活性化する役割を担うことが重要 ⇒地域活動における社会教育士の活躍機会の拡大により、社会教育主事の配置が、地域における社会教育やその関連分野の実践をつなげ、各取組の相乗効果的な充実を図る。」とされている。

そして、最後の「社会教育人材に求められる能力・知見等とその養成の在り方」では、「多様な人材が社会教育の専門性を身に付けようとするニーズに対応していくためには、様々な教育機関によって、地域のニーズに基づき、工夫を凝らした多様な講習や養成課程の選択肢が提供され、受講者が自身のニーズに応じて学習内容等を選択しうる環境を整備・拡充していくことが重要。

社会教育主事講習・社会教育主事養成課程の修了は、社会教育人材の**エントリー条件**であり、社会教育主事講習等においては、社会教育に関する基本的な理解も含め、様々な実務経験を積むに当たって重要となる基本的な能力・知見等を身に付けることに比重を置くことを基本とすることが適当。

講習等の修了後において、経験を積む機会や自主的あるいは相互に学ぶ機会、様々なニーズに応じた多様な研修の機会等を確保することにより、社会教育人材の資質の向上を図り、活躍を促進していくことが必要。」と。

これについても、基本的には、特段異論はない！

次に、「社会教育人材の養成に係る具体的な改善方策」として、「社会教育主事講習の定員拡大」「多様で特色ある受講形態の促進等による受講者の選択肢の拡大」「社会教育主事養成課程における取組」「講習等の質の更なる向上に向けた各機関の取組の共有」「社会教育主事講習の受講資格の明確化」「社会教育に関する民間資格等取得者の一部科目代替」が挙げられているが、

ここでは、その具体については割愛する。

(3) 今後の検討事項(案) →問題は、その先にある課題解決への道筋(見通し)の確かさ(力強さ)である！

最後に、「3. 社会教育人材部会における今後の検討事項(案)」が挙げられ、次の6項目が示されている。

- (1) **社会教育人材の活動促進**：学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進を含めた学校教育や、首長部局、NPO、民間企業等で、社会教育の知見と当該分野の知見を組み合わせながら活かしていくような活躍が期待。

社会教育人材の各現場における実際の活躍や社会教育人材に対する期待等についてヒアリングを行い、社会教育士の認知度向上やロールモデルの提示による社会教育への参画促進を含め、社会教育人材の活躍促進の方策を検討。

- (2) **社会教育人材のネットワーク化**：社会教育人材のネットワークを構築するに当たっては、行政職員に限らない社会教育関係の幅広い人材で構成されるコミュニティであることも考慮することが重要。

今年度実施する社会教育士及び社会教育主事を主たる対象とした試験的な運用を通じて、関係者の意見も聴取しながら具体的な課題を特定し、社会教育人材ネットワークに求められる機能やオンラインの活用も含めたその具体的な手法を検討。

検討に当たっては、社会教育に携わる人材が多様であることを踏まえ、将来的には社会教育士及び社会教育主事に限らず、社会教育主事養成課程の学生その他の社会教育に携わる関係者が広く活用する可能性を念頭に置く。

- (3) **旧制度における受講者の積極的な社会教育士の称号付与**：社会教育人材の活躍促進の観点から、旧制度における修了者のうち、社会教育主事の実務経験等を十分に有する者に対する社会教育士の称号の付与について、更なる検討。

- (4) **修了証書の在り方**：社会教育人材のネットワーク化の検討状況やデジタルバッジの活用可能性を含め、修了証書の在り方について、その発行体制も含め、検討。

- (5) **社会教育主事の配置促進**：「地域全体の学びのオーガナイザー」である社会教育主事の配置により、地域における社会教育やその関連分野の実践をつなげ、**地域全体を俯瞰した連絡・調整を図る体制を各教育委員会で整備**することが望まれることから、社会教育主事の配置に関する実態把握を進め、今後の対応を検討。

- (6) **継続的な学習機会の確保等**：社会教育人材に広く開かれた継続的な学習機会の確保や、社会教育主事の職務や経験に応じた研修の充実が重要であることから、**社会教育人材ネットワークの活用**や国・地方公共団体が行う研修のオンデマンド配信等の推進など、継続的な学習機会の確保に向けた施策の検討。

その際、学習の成果を容易に示すことができ、専門性や得意分野を示すことにもつながりうるデジタルバッジの活用の可能性も併せて検討。

以上のように、「課題」は見えているし、共有もされていると思われるのであるが、しかし、その実現に当たっては、かなりの壁もある?!如何にして、その壁を乗り越えられるかである?!

(つづく)

20 問題は、それ（「課題」）を、誰（どこ）が、どのように担っていけるのかである！

(1) 課題提示だけでは先へは進まない?!問題は、誰（どこ）が、どのように、それを担っていくのかである！

本号は、前号（19）の直接的な続きである！そこで紹介した、中教審生涯学習分科会（社会教育人材部会）の方向性（施策案）提示は、まだまだ「中間的まとめ」ということでもあるので（今夏に、最終的なものが出来上がるらしい？過日の研究会での発言！）、これからの推移を見守るほかないのであるが、

いずれにしても、問題の核心は、そうした状況認識・課題の提示（文科省による公的表明）が、本家本元の「社会教育（行政）」は当然であるが、他方で、呼びかけられている（関わりがあると見做されている？）、社会教育（行政）以外の関係部署・分野、とりわけ学校教育関係者の方に、どのように受け止められるのか？

そしてまた、そこに、今回の方向性・施策の提案が、どのくらいの影響を与えるのか（状況を変えていけるのか）である？私としては、そこが一番注目（期待）したいのであるが、果たしてそこがどうなっていくのかである！

何故なら、それは、間違いなく「総合教育政策」なのであり、「教育（行政）全体」の課題でもあるからである！

すなわち、ここでははっきり言えば、それらが、従来からの、社会教育（行政）からの一方的なお願い（相変わらずの片思い？この構図・関係は、これまで何十年にも亘って続いている！）から、いかに脱却できるかということであり、その辺りの目配り（見通し）が大いに気になるということである！

すなわち、それを含めて、改めての（最大の？）問題は、そうした課題を、誰（どこ）が、責任をもって、しかも持続的に担うのかである！否、担えるのかであるということである！

要は、課題提示だけでは、その先が進まないということである（教育基本法第3条に規定されている「生涯学習の理念」の実現は、社会教育（行政）だけでは不十分、不可能だということを学んできているはずである？）！

例えば、「社会教育士」にあっては、養成（資格付与）だけは出来ても（そのニーズも、それなりにはある！）、その先にある、彼らの活躍場所あるいは活動形態の保障（身分や収入等を含む）が、これまで以上になされなければ、否、正直に言えば、抜本的な変化となる、まったく新しい（否、強固な！）施策、しくみが伴わなければ、その活躍の場の実現は難しいということである！

しかも、「社会教育主事」と「社会教育士」の協働は、その中でも必須なものとなるが、個々の任意性・主体性に任せるだけでは、ほとんど力とはならない?!

その意味で、私が、今回の提案で、最も期待したいのは（私自身は、これま

で何度も、そういうことを提唱してきたが！)、「社会教育人材をハブにした人づくり、つながりづくり、地域づくり」ということであり、そこにおける「社会教育主事」と「社会教育士」の協働のしくみづくりが重要だということである！

まだまだ「中間的まとめ」ということでもあるので、これから先の論議・提案を温かく？期待するしかないが、とにかく、呼びかけられている？、社会教育行政以外の関係部署・分野、とりわけ学校教育関係者の方に、その思いが力強く伝わらなければ、多くは現状の追認に留まり（それさえも、ある意味では怪しい？）、結局は、元の木阿弥とならざるを得ない？！

つまり、現状変革は、甚だ難しいということでもある！

(2)「社会教育人材をハブにした人づくり、つながりづくり、地域づくり」に向けて

くどいようだが、問題は、それを、誰（どこ）が、どのように担うかなのであり、課題提示だけでは、その先が進まないということである（一応は、教育委員会とはあるが、果たして、それはどうなるのかということである?!）！

換言すれば、それは、社会教育（行政）からの一方的なお願い（相変わらずの片思い？）から、いかに脱却できるかということでもあるが、その覚悟と、その辺りの目配り（見通し）を大いに期待したいということなのである！

敢えて忖度なしに言わせてもらえば、「役所のセクショナリズム」！もちろんそれも、分からないではないが、何のために「総合教育政策局」としたのか？そういうことでもあるわけである！

ただし（現実を見据えれば？）、そうした厳しい状況（逆境？）は、これからも続くであろうし、たとえ心ある職員・担当者がいたとしても（国、地方を問わず！）、諸事情で（端的には「人事異動」や「任期切れ」）、そうした厳しい状況（逆境？）を、抜本的に打開していくことは、限りなく不可能に近い？！

私は、これまで、与えられた職務を全うしながらも、何とかして現状打破を試みる人達を何人も見てきた！そして、依頼された講師や委員等として長年協力もしてきたが、結局、彼らは、どこかへ行ってしまった（他所の部署への移動！挙句の果てには、途中で退職した人もいた！）！

否、それは、私の、一方的な評価、思い入れであり、誰もが、真面目に（一生懸命に？）仕事をしてきたという点では、互いに違いはない（たとえ不承不承の配属であったとしても？ただし、実際には、こういう人も沢山いたが！）?!それは、一方では、認めなければならない？！

最早明らかであろう！ここで言う「社会教育人材(社会教育主事&社会教育士)の養成及び活動推進」については、図らずも、私自身も、この「新・教育協働への道」(もちろん、それ以前の論考においても!)で、繰り返し、その重要性を論じてきたつもりであるが、

問題は、その重要性（課題意識）を、誰（どこ）が、どのように受け止め（引き受け）、そこに求められる具体的なしくみづくり（資格の取得や研修機会の確保等を含む）を行っていくのかなのである！

現在でも、そのことを十分に理解し、そのためのしくみづくりを鋭意実現しているところもあるかもしれないが、全体としては、まだまだそのような段階（状況）には至らず、次から次へと現れてくる、眼前の個別課題の対応に汲々としている（もちろん、それが精一杯ということでもある？）？！

しかるに、そういう意味では（現実を見据えれば？）、「期待はしたいが、必要以上の期待はしてはいけない？」

残念ながら、今の私は、このようにも思っているわけであるが（これは、卒業生達にも言えるが！）、そうした厳しい状況（逆境？）は、これからも続くであろうし、たとえ心ある職員・担当者がいたとしても、「人事異動」や「任期切れ」等によって、儂くも？頓挫してしまうということでもある？！

(3) 3月16日（土）に期待する！しかし、それは、最後の期待？でもある？！果たして、どうなるか？

そんな中、別途作成している新通信『『岳陽』と共に』（第19号）で述べているように、ある意味「最後の期待？」ということ、ある企み？を考えている私である！

すなわち、それに向かって進んでいけるのではないかと考えている（実際は、そうあって欲しいということであるが！）、私なりのチャレンジの機会が出て来たということであるが、以下は、転載ということになるが、別途、それについて語っている文章である（新通信『『岳陽』と共に』第19号）。

その企み？（インタビュー・フォーラム）がどのようなものとなるのか？そして、それが、どのような波及効果を生むのか？改めて、一人でも多くの人達の参画と理解を求めたいものである！

ひょんなことから、以前から実現させてみたいと思っていた交流が出来そうである（3月16日（土）午前。形式は、「インタビュー・フォーラム」という名のズーム交流。ただし、タイトルは未定）！

それは、今、沖縄で頑張っている4人のNPO法人・一般社団法人の職員（MJさん・MSさん→公民館受託者・館長/MHさん・Yさん→青少年の家・児童館受託者・副所長/館長）と、長野県泰阜村で、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターを運営しているTさん（代表理事）とのコラボ交流である！

趣旨は、長野のTさん（達）がやってきたこと（「ひとづくりとまちづくりの循環の究極体現」）を参加者全員で共有し（学び）、それを踏まえて、参加者全員の思いと力の結集（仲間づくり・後継者づくり）を、改めて行ってほしいということである（であれば、タイトルは、「ひとづくりとまちづくりの循環～そこ

には、何が必要なのか？～インタビュー・フォーラム：「人」と「思い」の結集！」
とでもなろうか？)?!

現役を退き、ほとんど公的な関わりを辞してきた私であるが、この間唯一の、玉城青少年の家の、自称？「相談役」をやりながら痛感したことは、「教育協働」（「学校教育」と「社会教育」の協働）を実現するためには、彼らのような、傑出した思いと力のある、そして、それを「持続的に行うことが出来る」人達（地域や学校、行政を動かしていくプロモーター的人物？）が必要だということである（現実には厳しいが！それ故に、応援したいのである！）!!

今回の面々は、これまで私が出会ってきた関係者の中で（教員や行政以外）、その思いと行動力（企画力も含めて！）が抜きん出っていて、関係者の、新たな模範（先行く人？）となり得ると評価している人達であり（ある種の役割変換→それは、人事異動のある公務員には限界がある？）、世代的にも、そのことが期待出来る人達である（50過ぎと40過ぎの各二人！二層の働き盛り？そこが、ある意味ミソ？）！

ただし、こうしたお節介？は、これが最後とはなる？!

ということで、その企み？（インタビュー・フォーラム）がどのようなものとなるのか？そして、それが、どのような波及効果を生むのか？

改めて、一人でも多くの人達の参画と理解を求めたいものであるということであるが、ここでは、そうした思い（期待？）に応え、次なるアクションとして、自らの仲間や同僚、そして他の分野・職務を担っている人々に対して、その恒常的な交流と互いの知恵や力の結集を図るべく（中教審の言う「ハブづくり」として）、ここ沖縄の地から、新たな（最期の？）発信を行いたいと思っているということである！

そして、ゆくゆくは、その「ハブ」を強固なものにしていくための「(仮称?)教育協働アカデミー」というようなものも発足させることが出来れば、ここで示されている「社会教育人材の養成及び活動促進の在り方について」も、具体的な姿・形を得られるのではないかと考えている次第でもある?!

ちなみに、5人の登壇者について、もう少し詳しい情報を届けたいのであるが、ここでは、誌面の都合上、それが叶わないので、それについては、事前に作成される「ちらし」（来月上旬には完成予定？「玉城青少年の家」のHPにアップされる！）に、彼らの「プロフィール」と、事業・活動等を示した、それぞれの「HP」のアドレスを掲載してもらうことになっているので、

当日の参加の有無は関係なく、その情報を是非入手して欲しい！私が、何故、彼ら（そこ）に声をかけ、その思いと実績の交流を企図しているのか！その理由が、分かってもらえるはずである！

とにかく、まずはみなさん、3月16日（土）のズーム交流に集結しましょう！待っています！

(つづく)

※若干加筆あり